

天宮UFO研究室通信

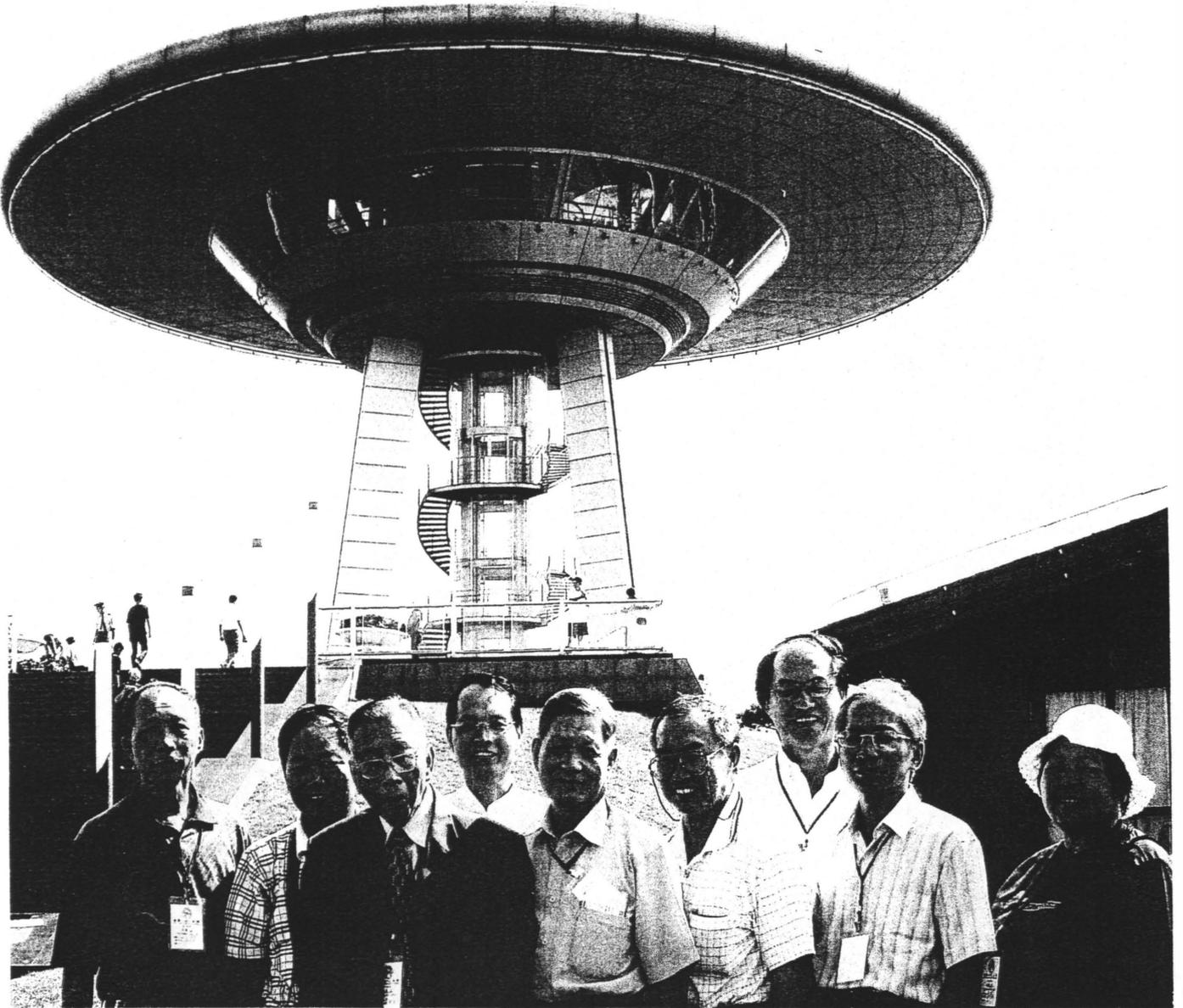
Amamiya UFO laboratory communications

----- 2006年1月16日 第26号 -----

Kiyoshi Amamiya: 193-5, Byodobo-cho, Tenri-city, Nara pref. 632-0077 JAPAN

日本国632-0077天理市平等坊町193-5 天宮清

電話: 0743-63-2539 e-mail: ttdkh395@ybb.ne.jp



2005年9月に発行された台湾飛碟學會出版の『探索探索』第28集の表紙を飾る大連の空飛ぶ円盤型展望台を背景にした参加者達。向かって左から3人目が同会名誉理事長の蔡章猷氏。その右が台湾UFO界の創始者呂応鐘氏。

『探索探索』第28集では、何顕榮氏の12ページに及ぶ研究論文「南島語族的原郷是台湾」で、仮説的沈没ムー大陸との関連で「台湾太陽帝国」という概念を提示しているのは注目される。

また同誌31ページには、「一、幽浮現象」と題し、有名な日本人UFO研究家Kozo Mikami氏による論文(英文)からの翻訳が掲載されている。原文は京都の三上氏による『BROTHERS』掲載の記事。

かつて「天文学者はUFOを見たことがない」といったことが、常識のように唱えられた時代もあったが、実際はクライド・トンボー博士など天文学者によるUFO目撃例は多い。エドワード・ルッペルト著『未確認飛行物体に関する報告』166ページにも「UFOに興味を示す者の割合は、天文学者群より対照群のほうが高い、すなわち、天文学者群は41%、一方対照群は86%が興味を示していた。それにもかかわらず、UFOを目撃したのは、天文学者群が11%、対照群は1%だった。このことはグループとしては、天文学者の方が平均的な市民よりも、はるかにUFOを目撃しやすいことを示している。」

UFO汽车祝世界UFO大会圆满成功



户场

乐购Hymall

经典即特后

中国石化集团

和平广场

乐购Hymall 银泰百货

2005 世界 UFO 大会



2005中国大连世界UFO大会全体代表合影

7133900

大自然数码影视

0579-7133901

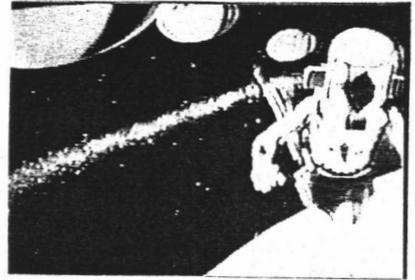
2005年08月09日



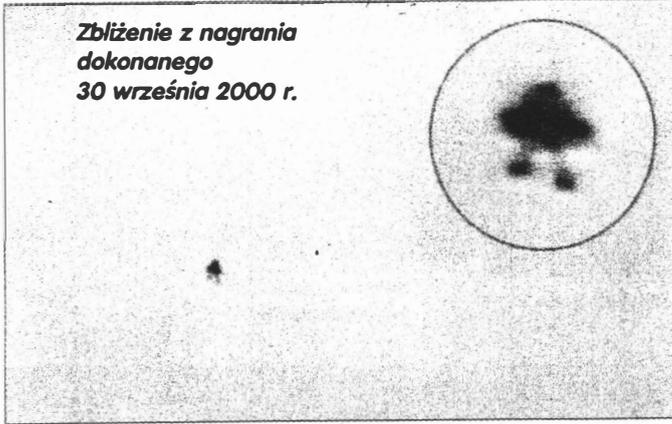
カチナ人形

メキシコのフライング・ヒューマノイドは 古代神話的「天降人」の再来か？

「私はもう一人の御使が中空を飛ぶのを見た」「私はもう一人の御使が、
大いなる権威を持って、天から降りて来るのを見た」(ヨハネ黙示録)
「かのキヘー・カルティナーリがいうには、古代メキシコの岩石彫刻の
なかに、背骨の上に着けた突起のようなもので、人を空中に持ち上げる
怪物のようなものがあり、さしずめアメリカ軍のバードマンが何か背
中にミニチュア・ロケット・モーターをつけて飛ぶ光景が想像される」(フレイク
著・大陸書房『やはりキリストは宇宙人だった』p. 160)
…こんな神話的状況が現代のメキシコで起こっているらしい。写真は
ポーランドのリシャニキェビツ氏提供『NIEZNANY SWIAT』2005
年11月号より。



カチナ宇宙起源説の図解

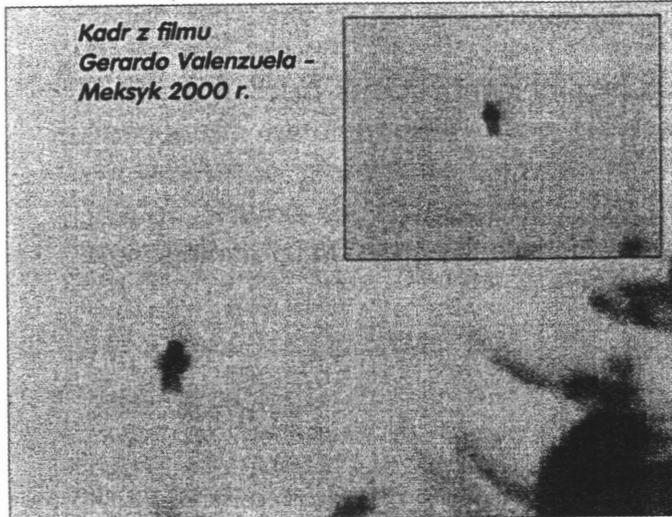


Zbliżenie z nagrania
dokonanego
30 września 2000 r.

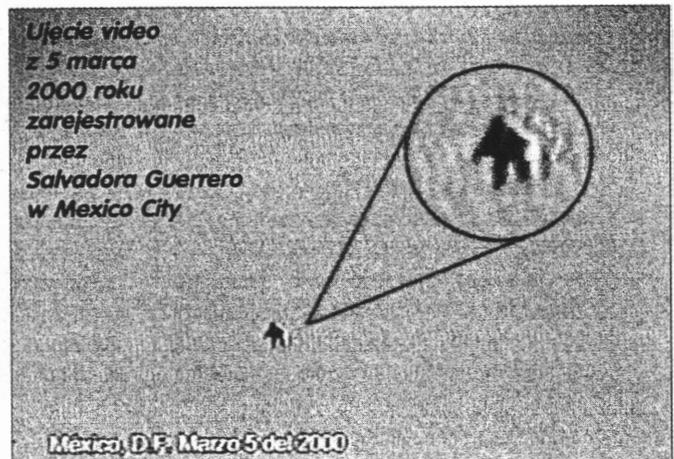


Jeszcze
jeden kadr
z 17 czerwca
2005 r.

6 17 2005
7:12:11 AM



Kadr z filmu
Gerardo Valenzuela -
Meksyk 2000 r.

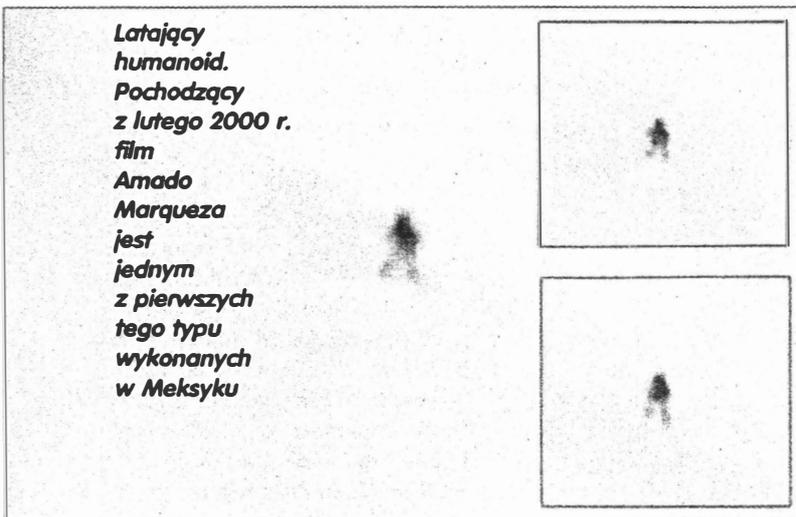


Ujęcie video
z 5 marca
2000 roku
zarejestrowane
przez
Salvadora Guerrero
w Mexico City

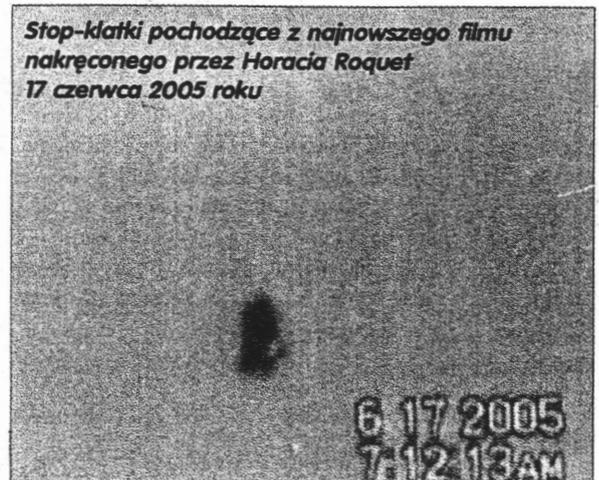
Mexico, D.F. Marzo 5 de 2000

2005年6月17日に撮影されたフライング・ヒューマノイド
何度かテレビで放映された映像では、空中の人型自体の動きは
なく、同じ姿勢のまま空中をゆっくり移動するように見えた。

頭、胴体、手、足と人の形に似ているが、実際の
人間とはバランスが異なる。日本の江戸時代にも
「人型の飛行物」「馬に乗る空中の人」の目撃
があった。



Latający
humanoid.
Pochodzący
z lutego 2000 r.
film
Amado
Marqueza
jest
jednym
z pierwszych
tego typu
wykonanych
w Meksyku



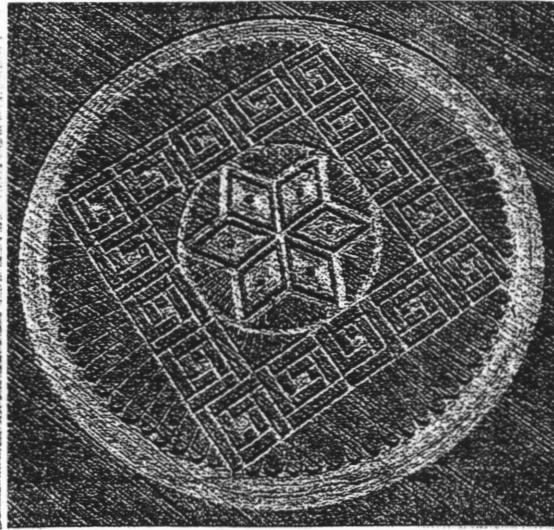
Stop-klatki pochodzące z najnowszego filmu
nakręconego przez Horacia Roquet
17 czerwca 2005 roku

6 17 2005
7:12:13 AM

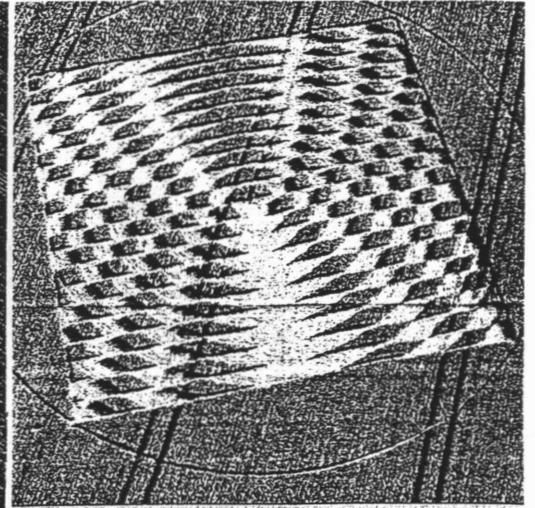
2005年英国クロップフォーメーションの美術から



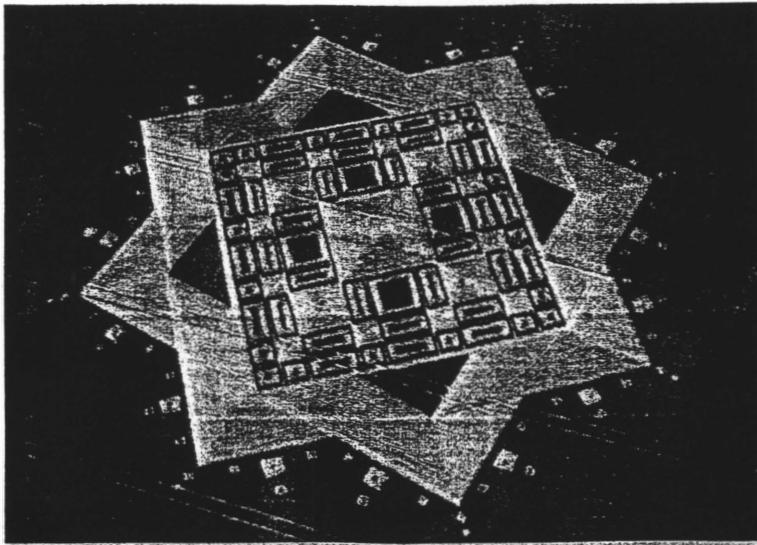
Formation in der Nähe vom Langgrab „Waylands Smithy“, 9. August 2005.



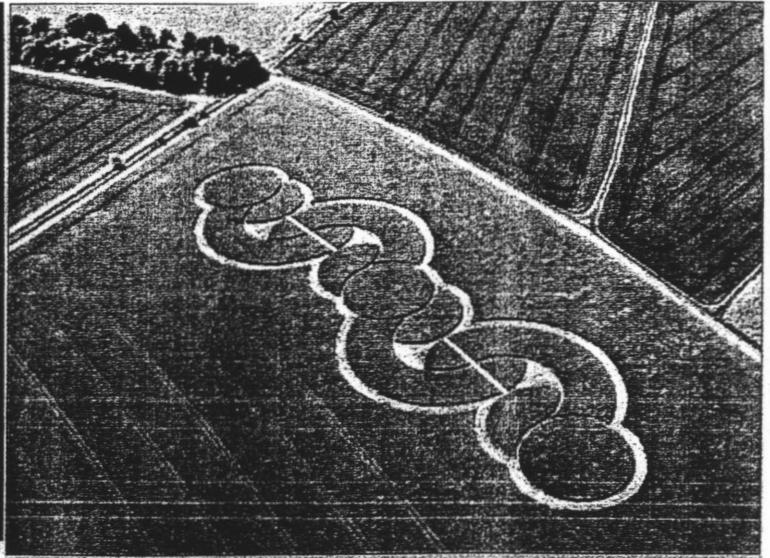
Kornkreisformation nahe Uffington White Horse, 13. August 2005.



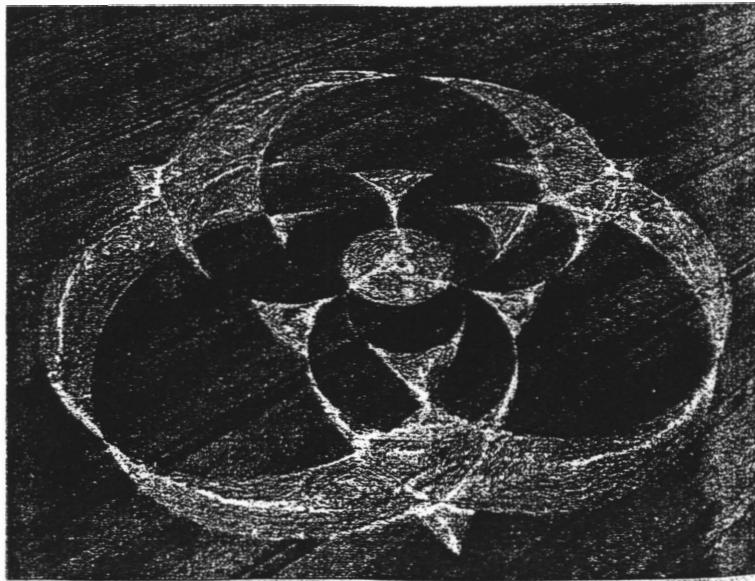
Aldbourne, 24. Juli 2005.
Ein Tripol-Magnet?



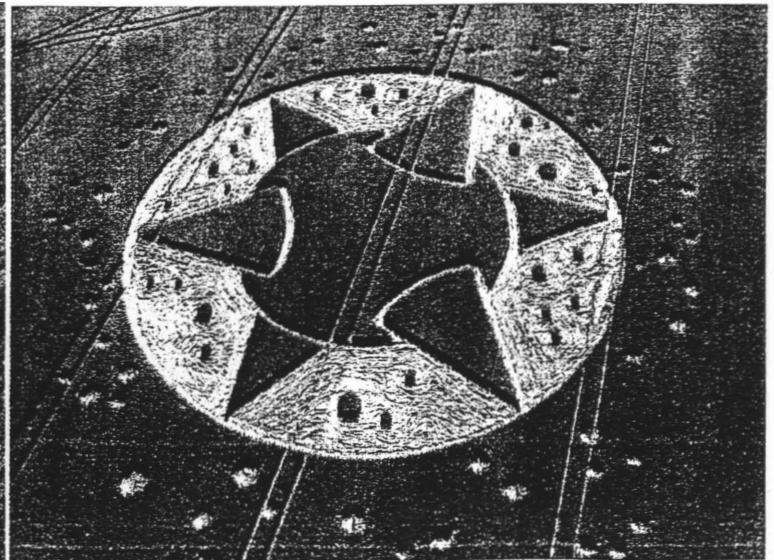
Eastfield, Alton Barnes, 5. Juli 2005. Eine Darstellung des Neuen Jerusalem?



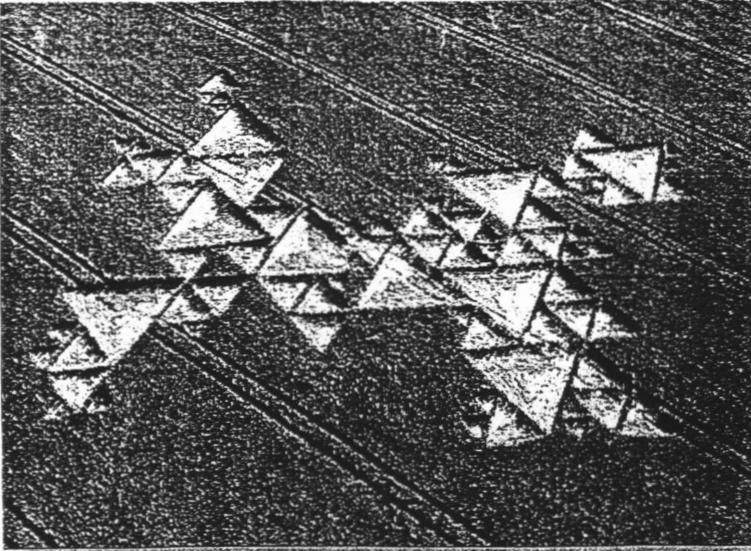
Piktogramm von Beckhampton, 5. Juni 2005:
Das Ergebnis eines Meditations-Experimentes?



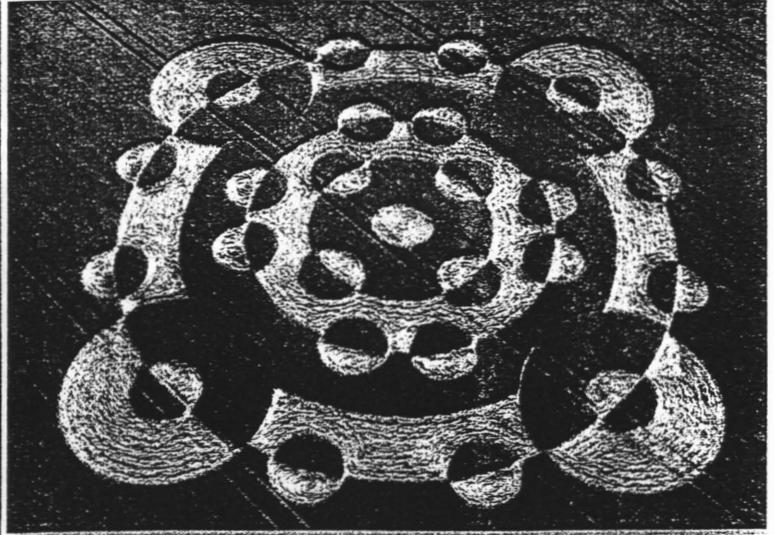
12. Juni 2005, Devils Den, nahe Marlborough:
„Die Rückkehr der Schwalben“.



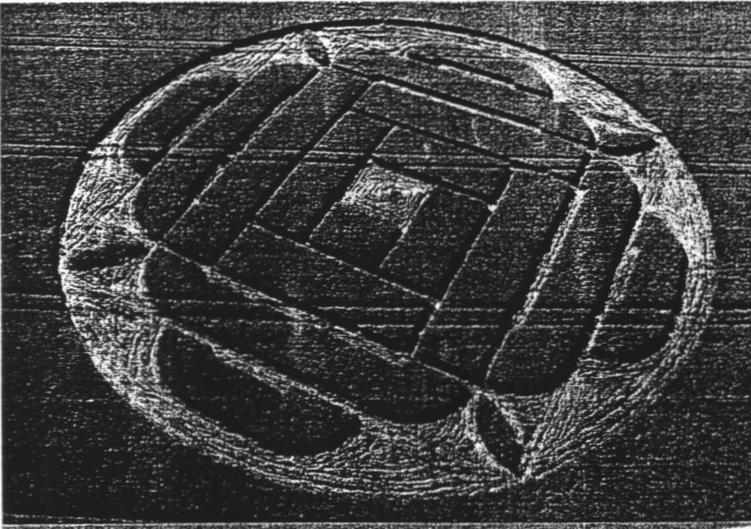
Lane End Down, Hampshire, 10. Juli 2005. 資料提供 : jutta Eli (Israel)
Ein sich drehender Stern-Tetraeder ?



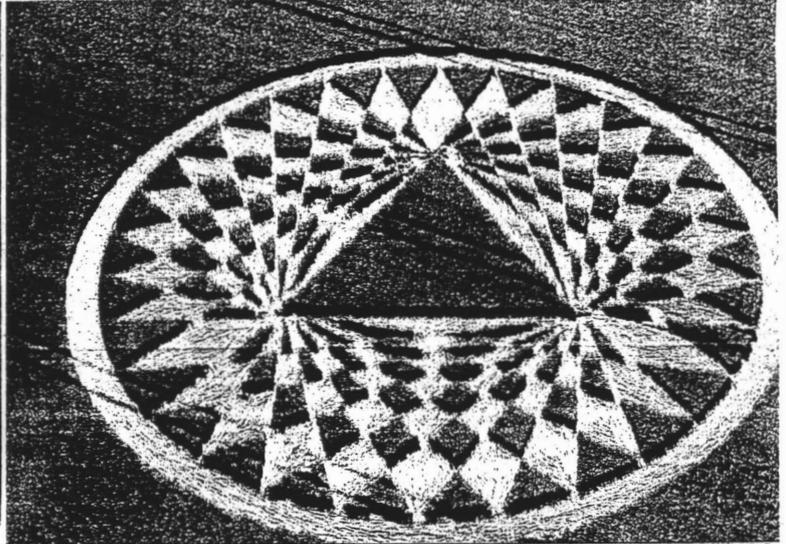
Savernake Forest bei Marlborough, 19. Juli 2005: | Die „Origami-Formation“.



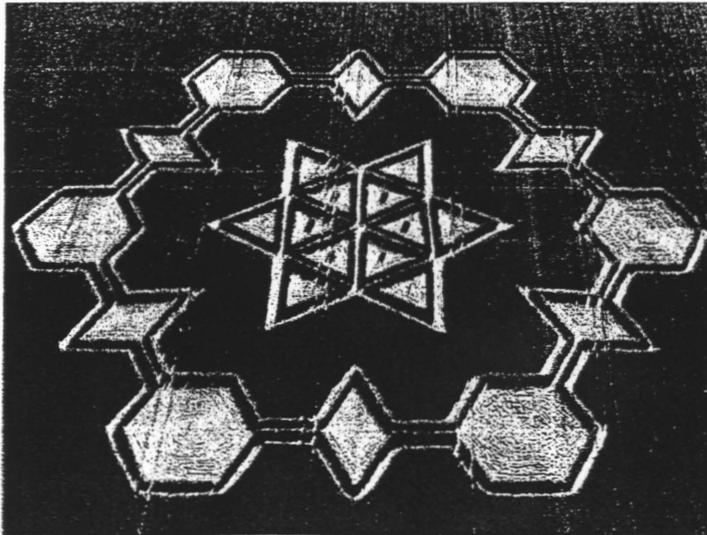
Lockeridge, 22. Juni 2005:
Zählt man hier alle Kreise zusammen, so kommt man auf die Zahl 33, die als die „Christus-Zahl“ bekannt ist.



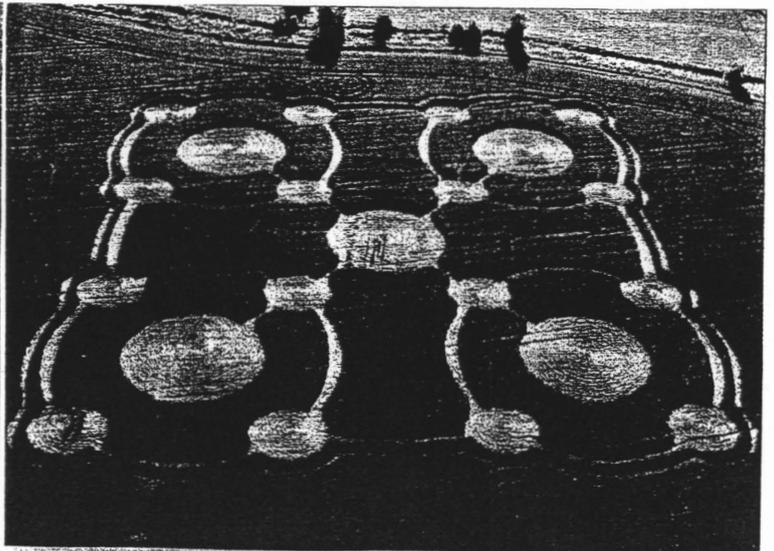
Lockeridge, 22. Juni 2005:
Freimaurersymbolik und Rosenkreuzersymbolik als Symbiose in einem Kornkreiszeichen?



Aldbourne, 24. Juli 2005. Blick durch ein Kaleidoskop?



Avebury Henge, 24. Juli 2005. „Es ist oben wie unten“. Hinweis auf die Tabula Smaragdina des Hermes Trismegistos??



Avebury Minor, 27. Juli 2005. Keltisches Kreuz oder „Quintuplet“. Besonderheit: der Zentralkreis hatte die Struktur einer Mer-Ka-Ba: das Korn lag in zwei verschiedenen Flussrichtungen niedergelegt

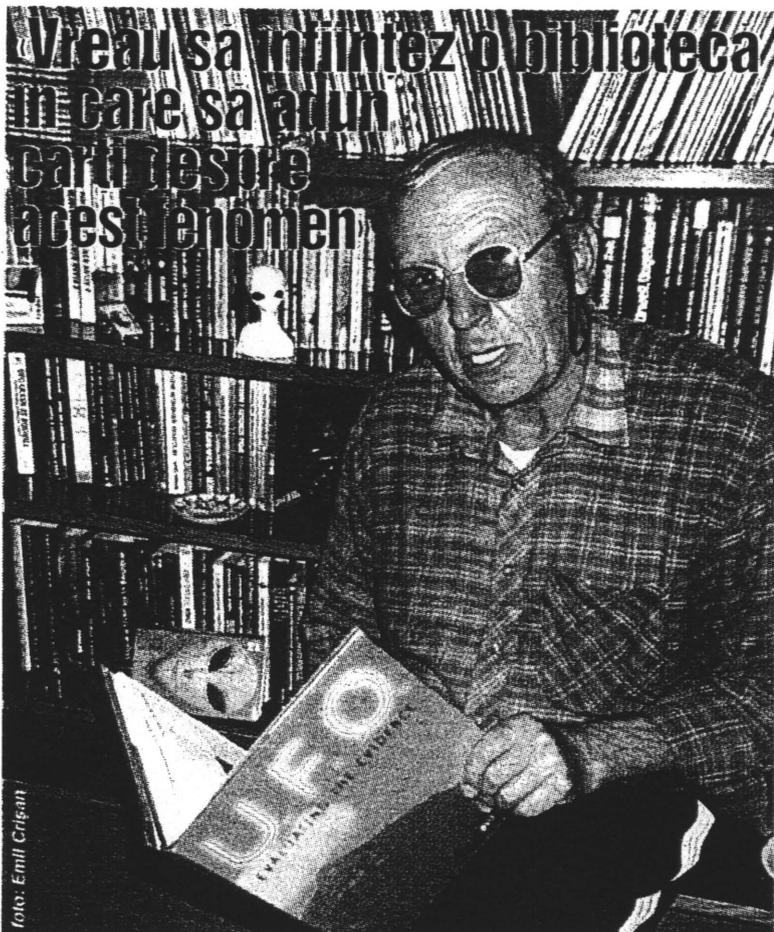
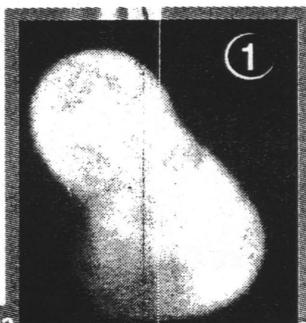


Foto: Emil Crisan

UFOには国境がない。研究論文や記事がどこの国の言葉で書かれていると、そこに用いられる写真や図を見れば、何について報告されているか、がおおよそ見当がつくものである。

ルーマニアのTURCU教授から送られてきた新書をここ紹介する。彼は1942年生まれで、編者より2歳年上である。今回の書物で取り扱われたUFO資料の年代は1992年から2005年までで、本書が“最新版”であることを物語る。巻末に7ページにわたる写真があり、驚くべきことに、中にはTurcu教授自身が撮影した変則的光跡や研究仲間

Turcu教授



Fotografia (1) făcută de Călin Turcu în noaptea de 11/12 decembrie 1974 a ieșit neclară din cauza aparatului neperformant. Cea făcută în noaptea din 18 ianuarie 1988 (2) a fost realizată cu teleobiectiv și expunere 12 minute



の合影があった。彼は単に机上でUFOを扱うのではなく、自ら撮影し、仲間と行動し、執筆し、各種新聞など媒体で啓蒙し、かつ「国際UFO資料館」を運営している物凄い人物なのだ。しかも、編者はコピーの簡単な冊子を送っているのに、彼は立派な印刷物で返礼してくる。奉仕的精神も旺盛である。話は飛ぶが、大連の世界UFO大会で知り合った、イスラエルU



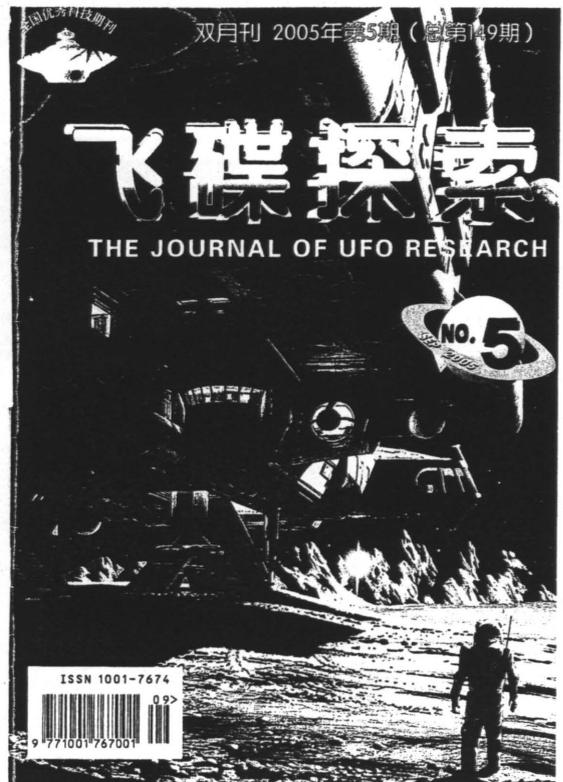
FOセンターのジュッタ・エリ氏からの通信によると、編者が送ったUFO資料がイスラエルのUFO仲間に公開されたとのこと。「皆、興味を持った」と書き添えられていた。前回の便では、日本語は読めないが、写真や図を見て内容が分かる、と述べられていた。

1910年から30年ころまでに生まれ、現代UFO研究を開拓した“第一世代”が相次いで世を去る中、アーカイブArchivesという言葉がよくきかれるようになった。「記録保存所・保存された記録・文書」といった意味だが、UFO問題に携わった当人が世を去っても、その人が収集した資料や行った研究の成果は、失われることなく次代に引き継がれてゆきためには、不可欠な要素である。

UFOは再現性のない偶発的の局地的な現象であり、それを対象に考察を行うためには、文書記録、映像記録が欠かせない。

日本でも「UFOライブラリー」の荒井欣一館長の逝去前に、福島UFOふれあい館への資料移管が行われたが、日本UFO研究会の平田留三氏のUFO資料は散逸したと聞く。また日本UFO科学協会の高梨純一氏の資料や、池田隆雄氏の資料も価値は高い。

しかし、現実問題として、日本UFO研究記録保存所という建築物や場所というのは、不可能であり、やはり先に寿命を迎える者が後に続く者へ、「伝言」的資料を、少しづつ渡してゆくしかない。今回、「中国UFO研究の歩み」という未公開の草稿を添付したのも、以上の理由による。UFOの歴史は長大だが人の寿命は短い。



中国からの最新号

編集者の周辺



■レーニア山の石、配置計画

私は2000年6月に、米国在住の岡村堯氏と共にレーニア山を訪れ、岡村氏の提案でレーニア山から持ち帰った13個の石を、折りを込めて日本の要所に配置する計画を立てた。

まず、この石を「武装解除」の故事を伝える聖域に一時、浸すことにした。すなわち古事記雄略記における「一言主との出会いによる雄略天皇の武装奉納」にヒントを得たのである。現代空飛ぶ円盤史発祥地であるレーニア山の13個の石を持って一言主神社を訪れ、2個を神社に置いて、11個を持ち帰る、という計画であった。

7月31日、前栽駅発午前5時46分の近鉄電車で平端、橿原神宮前、尺土と乗り継いで御所駅に着く。そこから徒歩で一言主神社へ向かった。

売店で朝食を買い、飲まず食わずで葛城古道を歩いたが、初めてなので3度ほど迷った。道なりに歩くとダメであった。あぜ道がアスファルトの舗装道路に変わり、その舗装道路のまま行くと、いつの間にか山の中に入ったり、墓場に着いたりした。

山に入る道に戻ると、舗装道路のカーブの途中に建つ小屋のような建物の間の道が「葛城の道」の続きであった。そこを行くと田の畦道になり、やがて舗装道路に合流するなど、まったく予想がつかない。慣れた人なら40分のところ、1時間半以上迷い続けた。

ようやく神社に着いて石の奉納を済ませ、朝食をとって、こんどは車道に出て急いで歩き、御所駅に着いたら10時であった。しかし、迷った行く先々で新しく買ったデジタルビデオカメラの撮影練習をした。足が棒のようになり、湿布を貼った。



■レーニア山の小石、広島公園に配置

2005年8月5日夜、勤務を終えて身支度を整え、新幹線で午後10時頃広島駅に着く。到着時刻が遅かったので、平和公園までのバスはなく、広島駅前での経過を待つ。

深夜12時頃、駅前のベンチで寝ていると、旧知が現れたので、30数年ぶりでもあり、起き上がって一晩中話をし、夜明け前の一番タクシーで平和公園に向かう。

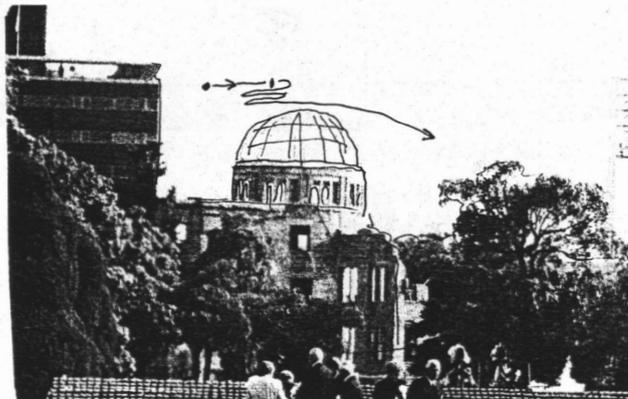
広島公園には既に夜通しの業を行う人々がいて、ある若者と少し話をする。旧知が広島公園で撮影した写込みUFO写真の検証のため、

撮影現場に行き、ネガをルーペで見て像を確認し、風景と重ねて状況を確認した。

式典では広島市長の平和宣言のとき、ドーム付近をビデオ撮影した。その後、小石2個をドーム近くに配置する。

■原爆ドーム上空で往復運動する物体

帰宅して撮影した映像を見ると、市長が「汝、殺すなかれ……」という言葉が発した頃に、ドーム西側の上を水平に移動し、また引き返し、と何度か往復してからドームから東へ去る物体を確認。大型の鳥か、別の何かか、映像を拡大しても識別はできなかった。一応、この件を掲示板「天の浮船」に書き込んだ。



■1995.8.6広島公園上空のUFO像

1995年8月6日午前8時頃、UFO研究者K氏は広島平和公園の平和記念資料館西館前の「冷水接待所」付近から、式典会場方向(その向こうに原爆ドーム)方向に向けてシャッターを切った。

K氏は後日、このネガに尾を引く物体状の像が写り込んでいるのを発見した。しかし、風景に露出を合わせたプリント上では、その像が現れず、長い間適切な処理を待って保管してきた、とのこと。

2005年8月6日朝に、私天宮は、撮影者K氏と共に広島公園内の撮影現場に立ち、明るくなった空を背景にそのネガをルーペで見て、問題の像を確認。

K氏よりネガを著作権と共に貰うけ、帰宅してフォトビデオカメラでネガを2段階に拡大し、ビデオモニター画面からフィルムカメラで撮影した。

問題の像は、「尾」とみられる部分がオレンジ色を呈し、「頭部」と見られる砲弾形の部分が水色を呈している。

「尾」のオレンジは空の朝焼けのオレンジ色よりは黄色に近く、頭部の水色は背景にある雲間の青空より白みがかっている。

位置は、原爆ドームの東にある目立つ高い建物(おそらくは広島グリーンホテルと思われるが、未確認)の見かけ上、右上にあり、仰角は低い。

像の色彩が背景の空に近いので、広角でみると「尾」が白っぽく見えるのみで、頭部の青は空の青と同じになる。

この誌面では、拡大像を提示し、広角像を図で示すことにした。

■第6回UFOフォーラム開催される

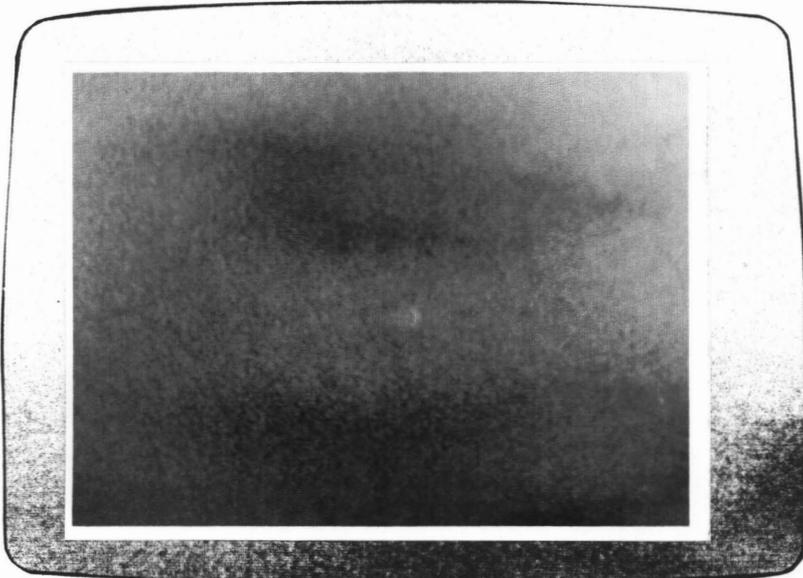
10月2日、大阪UFOサークル(OUC)主催による「第6回UFOフォーラム」が、大阪市中央区本町にある大阪産業創造館において開催された。

大阪産業創造館は新しい施設。早めに到着した私は、やはり早めに到着した乾達也氏、宮本健一氏、栗飯原直子さんと一階ロビーで情報交換。宮本氏から羽咋の村おこし仕掛け人の有名UFO研究者が農業分野に進出したとの情報を見せてもらい、各々感心したり驚いたり。乾氏からは航空機発着地図を空港ごとに記載したガイドブックを見せてもらう。栗飯原さんとはお互いの家庭の話。

到着した山野野 OUC会長が持ってきた数個のダンボールをエレベーターで上げてフォーラム開かれる教室の前に来ると、既に四国の津島氏、仙台の安藤氏が到着しておられた。教室前にはソファが並び、くつろげる空間が設けてある。教室も真新しい。

今回は、はるばる宮城県仙台市より「仙台UFOセンター」の安藤かず氏が参加し、「地元における軍事施設」や「空間のゆがみ」「UFO資料管理施設の提案」などを熱のこもった講演で紹介した。

私は初めて円盤を知った1955年からCBAに入会する1960年までの経過、CBAの松村最高顧問より「空飛ぶ円盤ダイジェスト」の編集者に任



8.6広島平和式典時、平和公園から撮影された砲弾状の像

命されて、学業放棄を余儀なくされた話、「白体」「黒体」「反射体」「色彩発光」といった独自のUFO現象分類、統計研究そして中国大連UFO世界大会の参加報告をビデオを交えて行った。OUCでは来年もフォーラムを計画している。

講演者と内容は以下の通り。

11:00-11:20 山野 逕 大阪UFOサークルの歩み

11:20-11:50 安藤かず 自己紹介、地元付近の基地情報、空間の歪みを示す写真の提示、UFO資料管理施設の必要性、東北UFOフォーラムの案内など。

11:50-12:10 津島恒夫 宇宙船乗船体験を中心に多数のUFO写真の提示など。

12:50-13:50 天宮清 世界UFO大会の報告など

13:50-14:10 林一男 UFOの語源と空飛ぶ円盤、1973.8高知県介良(けら)村小型円盤捕獲事件の調査と捕獲円盤の模型製作秘話、インターネットUFO情報など。

14:10-14:40 ひぐち たかし 地球製空飛ぶ円盤形飛行機の変遷と日本UFO界の批評。友人の見たUFOの図解など。

14:40-15:00 高橋稔 アブダクション体験とその後の変化など

15:10-16:30 全員の質疑応答 おもにブダクティーに対する質問。

18:00より別会場で懇親会。

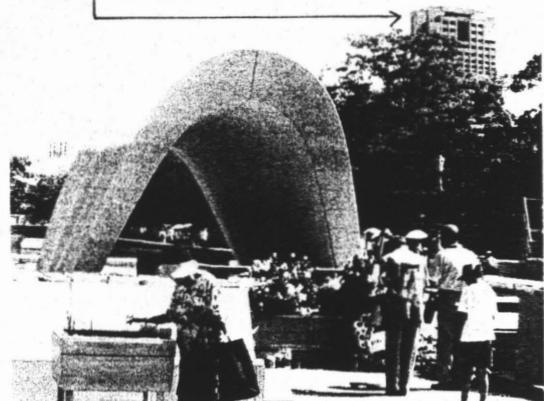
■山西省UFO研究会、大連世界UFO大会を速報

山西省UFO研究会理事長である太原理工大学の劉鳳君教授より、同研究会の機関紙『飛碟』が届いた。早速、大連UFO世界大会の報告が豊富な写真入りで報じられ、その中に私の写真もあったので、ここに紹介する。

同誌四版の武成智報告記事によると、吉林省と北朝鮮の国境にある長白山脈(チャンハイ)では、地震火山観測所におけるUFO目撃について詳細な報告がみられる。



日本著名的UFO研究家、我会顧問
天宮清先生作学术報告



右上:UFO状の像の位置

下:被爆死者の名簿が収められた慰霊碑

■世界UFO大会前、瀋陽上空にUFO?

2005年9月9日午前3時頃、神秘的なUFOが瀋陽上空に現れたのを現地の住民数人が目撃。写真が公開された。

撮影状況は不明だが、大きな光の上方にそれらしきものが見える。大きな光は街灯か?



■世界UFO大会閉会の日、会場の上空にUFO?

2005年9月10日午前5時56分、世界UFO大会が行われた大連市華宮大酒店において、黒っぽい球状の物体が目撃され、侯京僑氏によって撮影された。同時目撃者は撮影者を含め、黄延秋氏、冀建民氏の3人。カメラはデジタルの高級機でCanon パワーショット S21S。

像は透明感を感じる黒色の球状だが、二段階の濃淡がみられ、下部に反射が発光か不明だが僅かに赤系統の色彩がみられる。輪郭は鮮明で、完全な円ではなく、幾分上下方向が縮んだ楕円形。

なお、冀建民氏とは会場で見かけたが、残念ながら懇談の機会がなく、帰国後に手紙がきて、「会おうとしたら、すでに帰国していたので、非常に残念だった」との内容で、特にこの目撃については述べられていなかった。

いちおう、この写真のコピーを送って、詳細を問い合わせるつもりである。その結果が、この誌面で報告できれば良いのだが。

【なお、この写真は編者の通訳を担当した陳農氏からの手紙に同封されていたもので、彼の非常に丁寧な書簡を読み、感動した。】

世界 UFO 大会胜利闭幕之际

球形 UFO 现身会场上空

时间：2005.09.10 清晨 5:56 分
 地点：大连市华宫大酒店
 拍摄者：侯京侨
 目击者：侯京侨 黄延秋 冀建民
 相机型号：佳能 S2IS 型 500 万像素

この写真が撮影された2005年9月10日早朝5時56分、編者はこのホテルにいて、陳晨の朗読を録画する準備を

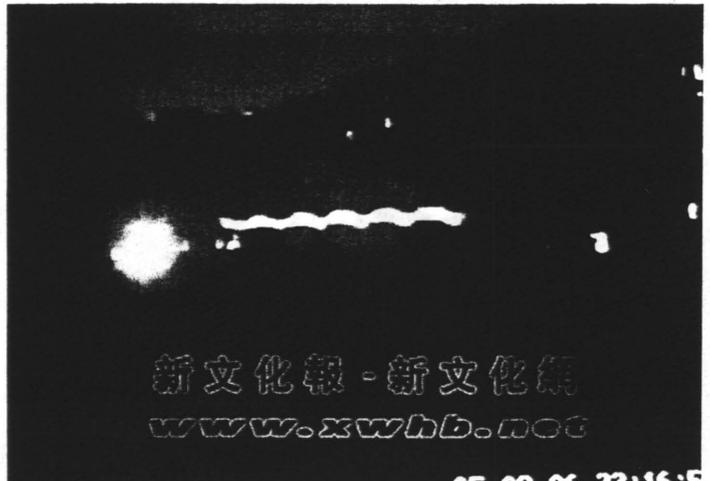


していた。この「UFO」の同時目撃者河北省肥郷 UFO 研究会の
 冀建民氏は、美術系の教師で、28年前に黄延秋氏による河北“飛人”調査員として中国全土に知られる研究者。1994年頃より文通している。多くの新聞や雑誌で

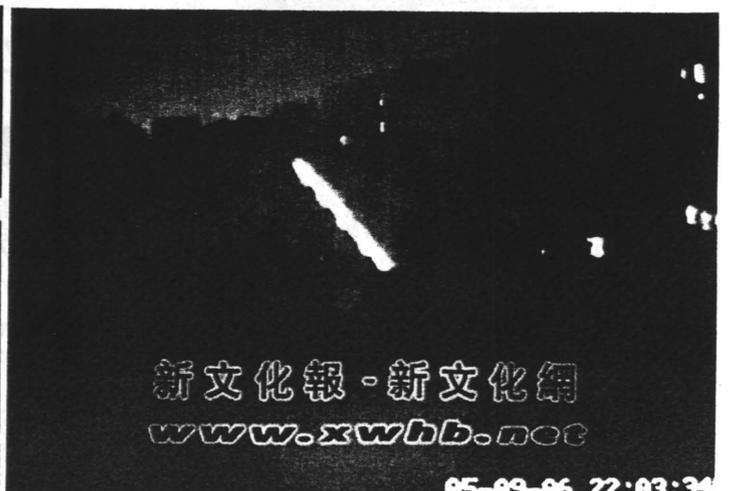
彼の調査報告は発表されている。また「UFOを呼んで目撃する」という日本でもみられる方法の実践者としても知られる。

黄延秋氏は1977年7月から9月の間、行方不明となり、その間、二人の「飛人」の背に乗って、南京、上海、蘭州、ハルビンなどの都市を訪れた、と語ったことで、UFO 研究家冀建民氏の調査対象となったもの。写真は約10年前に冀建民氏から送られてきたもので、黄延秋氏は現在、49歳の肥郷県農民として暮らしている。

インターネット「飛鏡新聞」「珍聞怪事」が伝えるところによれば、2005年9月6日午後10時から11時までに中国長春臨河街にある大学の監視カメラに謎の光源が飛びまわる状況が撮影されていた、と報じている。



形状は海藻に似て細長く、長さ4メートル以上、巾0.5メートルと推定された。近くの工事現場のサーチライトが反射したのではないかと、との説もあるが、UFO説もある。



05.10/8(土) 東北UFOフォーラム.



植木さん

木下館長

サスケ議員

仙台UFOセンター安藤さん

2005年10月8日(土)、福島県飯野町UFOふれあい館において、仙台UFOセンター主催の「東北UFOフォーラム」が開催された。編者は中国世界大会に行く直前に、同センター安藤氏より参加の依頼を受けたが、10月2日に大阪でUFOフォーラムがあり、福島は遠いので体力的にも無理とお断りするほかなかった。

中国から帰国して、写真とビデオを安藤氏に送り、当日は安藤氏により編者の中国大連報告がビデオと氏の解説で行われた。

仙台UFOセンターとUFOふれあい館より、当日の写真、録画を送っていただき、その内容を知ることが出来た。

まず有名なサスケ議員が出席され、同議員がメキシコに駐在中、UFO事件が続発したことや、同議員によるUFO目撃談など貴重な証言が記録された。

メインの講演としては、物理学研究家による重力、引力に

関する法則への疑念など、難しい内容だが、分かりやすい具体例を取り上げて解説された。

また個々の懇談も録画にあり、カメラに最も近い位置で対話する植木さんと日下部さんの内容が興味深かった。日下部さんは自ら撮影したUFO写真のアルバムを植木さんに見せながら、霊的な体験も含め広範囲な体験談を積極的に語っていた。

ここに掲載の写真は仙台UFOセンター安藤氏からの提供で、UFOふれあい館からのCDやDVDにも良い画像があったが、時間的に間に合わないため、割愛させていただいた。

また、仙台UFOセンターの安藤氏からは、日本におけるUFO資料館あるいは保管庫とも言うべき施設の必要性が説かれており、無人の家屋や不要になった施設などが考えられるが、維持管理の問題もあり、市民レベルでの実現は難しく思われる。

著名人のUFO目撃・UFO発言など

石原慎太郎
東京都知事



「空飛ぶ円盤」

先日ゴルフ場で一緒にあった紳士がコースを回りながら話のはずみで僕に「あなたは空飛ぶ円盤のようなものを見たことがあるか」という。

円盤かどうかは知らないが僕もことしの正月の夜、怪しい飛行物体を確かに見た。僕一人でなく連れの四人も目撃している。世間でいう円盤とは大きさも形も違って、黄色に光り輝いたかなり大きな球体が明るく尾を引いて夜空をよぎっていった。見た感じからいっても人魂やエイ光弾ではないことは確かである。

そう答えるとくだんの紳士が顔色を変え「私が川崎で見たのもそれと全く同じで、しかも忘れもせぬ正月二日の夜だった」という。正直いって二人とも、思い出し改めて興味悪くなり顔を見合わせた。

「どうも大変な世の中になってきましたな。もっともあなたなど若い方がたにはそうも感じられないかもしれませんが」と紳士はいう。

しかしこうした事柄になってくると年代の新旧にかかわらず、やはりなにか大変なことが起こりそうな気がしないでもない。既成の事実が日々信用している科学で盲目説明がつかないということほど不気味なものはない。僕は時折ふと予感のようなものを感じることもある。「案外、おれは人類の終えんに立ち会える。ある意味で幸運な世代に生まれてきたのではないだろうか」と。(石原慎太郎)

昭和33年(1958年)3月11日(火)の毎日新聞(夕刊)より



石原伸晃
行政改革・規制改革相

「UFOを4回も見た」

「僕は円盤を4回見ました。結構、怖かったです。今でもハッキリ覚えています。最後に見たのは、20歳ぐらいの時。大船駅の横を車で弟(石原良純氏)と乗って。当時から鎌倉山に円盤が出ると言われていた。車を止めて弟と見ていると動くんだから、あれは円盤だと思った。」

2003年1月4日日本テレビ「99サイズ」を報じた東京スポーツ1月7日記事より



三島由紀夫
作家

或る日のこと北村小松氏から電話があって、五月二十三日の朝五時ごろ、東京西北上空に円盤が現われるかもしれない、という情報が入った。

私は毎晩徹夜仕事をしているので、午前五時といえば、寝に就く時間である。四時半になると、待ちかねて仕事も手につかないでいた私は、妻を叩き起し、寝ぼけ眼の彼女を促して屋上へ昇った。私は双眼鏡を肩にかけ、妻はカメラを構えていた。

屋上はうすうす寒く、そこへ昇るか昇らぬかに、日が屋根の上から顔を出した。

(中略)

「五時半まで待とうよ」と私は言いながら、五時二十分ごろになると、そろそろぼからしくなり、眠くもなつて、屋上を降りたくなってきた。

五時二十五分になった。もう下りようとしたとき、北のほうの大樹のかけから一抹の黒い雲があらわれた。するとその雲がみるみる西方へ横引いた。

「おやおや異変が現われたわ。円盤が出るかもしれないよ」

妻が腰を落ちつけてしまったので、私もその横引く黒雲を凝視した。雲はどンドン西方へむかって、非常な速さで延びてゆく。西方の池上本門寺の五重塔のあたりまでのびたとき、西北方の一点を指さして、妻が、

「アラ、変なものだ」

と言った。見ると、西北の黒雲の帯の上に、一点白いものが現われていた。それは薬のカプセルによく似た形で、左方が少し持ち上っていた。そして現われるが早いか、同じ姿勢のまま西へ向って動きだした。黒雲の背景の上だからよく見える。私は、円盤にも葉巻型というのがあるのを知っていたから、それだな、と思った。

三、四秒、肉眼で追ったのち、私はあわてて双眼鏡を目にあてたが、焦点がうまく合わない。妻も写真機のファインダーをのぞいている。私が双眼鏡から目を離したとき、すでにその姿はなかった。妻はファインダーの中にキャッチしていたが、シャッターを切る自信がないままに、出現してから五、六秒で、西方の雲の中へ隠れたのである。

1960年頃の講談社月刊誌「婦人倶楽部」より

徳川夢声



「尋常4年(小学4年)の時、母に呼ばれて観たその物体は、お隣りの屋根の鬼瓦の上に鎮座しました正方形のもの。色はオレンジ、スーッと飛んで大岡越前守の屋敷の方向へ行き、二つに割れて赤と緑の星になり落下した。この偵察用円盤らしきものは、何故赤坂のヤキイモ屋裏の家賃5円50銭の家をみにきたのか判らない」

1961年8月27日、東京有楽町朝日講堂における「G・H・ウィリアムスン講演会」における講演より。



山川惣治
画家・児童文学

私が初めて空飛ぶ円盤と呼ばれている宇宙船を見たのは、昭和三六年の六月である。当時私は、新聞に少年エースという絵物語を連載していて、非常に興味を持っていた空飛ぶ円盤を途中で使ってみようと思ひ、いろいろな書物で研究していたが、どうも空飛ぶ円盤は実在しているらしいと確信がついたので、作品の中に書いた。すると新聞に円盤が登場するとまもなく、「C・B・A」という空飛ぶ円盤の研究団体の幹部諸君五人が来訪され、初めて日本にも熱心な空飛ぶ円盤の研究団体があることを知った。

この諸君はたいへんまじめな、学究的な人々で、科学的な記録や写真を見せられたので感心した。

私も空飛ぶ円盤を是非見たいものだということ、それならばテレパシー・コンタクトをしてごらんさない、宇宙人は、私のように円盤を作品の中に書いたりしている者には、とくに興味をもっていて、必ず円盤は、飛来するだろう、というのである。こうなると、まるでSF小説みたいで、私も半信半疑だった。

その夜、長女と運転手が青白い光を引いて飛ぶ空飛ぶ円盤を見た。その日の夜なので、私もほんとかしらと思ったが、一週間ほどたって、再度「C・B・A」の人たちが訪問されたので、あの晩長女が見た話をして、テレコンのことをよく聞いた。それは、頭の中で円盤を呼んでいると、それにこたえて空飛ぶ円盤が飛来するというのである。

その夜一〇時頃、妻は湯から上がって屋上で涼みながら熱心にテレコンをしていた。それは、主人の仕事の関係からも円盤をぜひ見せてほしい、飛来してくるなら、なるべくゆっくり飛んでほしい。そのうえ、大きくはっきりと現われてくれ・・・と、まことに勝手な注文をつけてテレパシー・コンタクトをしていると、四〇分もたったころ、急に頭の上が明るくなったので、ふりあおくと、灰皿ほどの大きさに見えたというから、かなり大きいダイダイ色に輝く円盤が注文どおりに、ゆっくりと頭上を旋回しながら北の空から南の空へ、立ちならぶ建物のかなたへ飛んでいったという。妻はびくりして声も出なければ、動くこともできない。やっと見えなくなってから、ベランダの手すりにつかまって、庭に向かって「円盤が飛んできたわ!見なかったの」と叫んだ。

さあ、家中大さわぎ、皆で屋上へかけ上がった。二〇分ぐらいついたが飛来しないので、私は新聞の仕事をやりにかけていたので下の仕事場へもどると、間もなく妻と長男、長女、次女の五人が、ワーッと歓声をあげ、円盤が飛来したと叫ぶ。私はまたかけ上がる。と、今、南の空からさっきの円盤が飛んできて、家の上空で旋回して東の空へ飛び去ったという。

その夜は、午前二時ごろまで七回にわたって円盤が飛来したが、とうとう私は見る事ができず、妻と子供たちだけが円盤を目撃した。

その二日後、屋上で観測していた長女の知らせで、円盤が家の上空に飛来してきたことを知ると、今夜こそはと、私は仕事もおぼり出して屋上で家族とともにがんばった。

待つあいだ、ほどなく、乳白色の洗面器ほどの大きさの円盤が幻のように目の前の空をかなりゆっくりと飛んでゆくのを初めて目撃した。

私ののちの何度かの体験によってわかったが、こんな大きな円盤が飛来することはめったになく、ゆっくりといつてもかなりのスピードで、音は全然聞こえないのである。この世に空飛ぶ円盤は実在することを実際に体験した感動で、私は息がつかまる思いだった。

その夜は十二回も円盤は我が家の上空に飛来した。それから私は何度も円盤の飛来するのを見た。あるときはダイダイ色に輝き、青白く輝き、乳白色に見えるときもある。その速度は音速の一〇倍以上であろう。空を見上げる視界のはじからはじまで、ひゅーとまっすぐに横切る。または中天から垂直に降下したり、空中で円を描いて飛び去る。地球科学ではとうていそんなすばらしい航空機は出来ない。

私は北海道のハヨピラで「C・B・A」の人たちと円盤を観測したとき、満天の星、銀河系宇宙だけでも何十億といわれる星を見上げ、星の向こうにまた光る星群のむらがり浮かんでくる壮さに感嘆した。何度か飛来する円盤は、無数の星の海を中心だけ輝いて飛んだ。あとはすきとおって見えたのだが、光り輝く星をすかして飛ぶ円盤の美しさを忘れることはできない。

雑誌『たま』2号より



西丸震哉

食生態学研究所所長
1923年9月1日東京生まれ

「…自分の信州の山小屋で、『もしUFOのほうで偶然じゃなくて、みせようとして出てくるなら、なぜ僕のところに出不いんだ、宇宙人だか何だか、もしいるんなら出てこい』と西の空をみながらいたら、だいたい色の楕円形のもの飛行機くらいの速度で飛んでくる。急いで家内もよんで、双眼鏡でのぞいてみた。そしたら光だけで実体がない。向こうの山との角度や距離から計算したら、その物体の長径が約250メートルあった。こんな飛行機はないですよ。」

1989年郵便局のリーフレットに掲載された萩尾氏との対談より。

「かなり以前だが、幸いなことに私はUFOを見た。北アルプスを望む北信(長野県北部)の私の山荘で西の空を見ながら『UFOよ、いいかげんなところに出たりしないで、まじめに考えている俺の前に出たらどうだ』とテレパシーを込めて言った。そしたら、夕焼けの明るい空に、橙色の大きなUFOが出て、太陽の沈む方向だからバックが明るいのに、それよりもっと明るくクッキリとしていた。すぐ家内を呼んで二人で見ていた。そしたら、北アルプスの稜線の向こう側にすーっと降りていった。」

家からアルプス之稜線までの距離は約23キロある。私の計算ではUFOを斜めに見ていて約350メートル、真横から見れば900メートルくらいだろう。その本体から光を放っている。UFOの母船らしい。」

1998年発行 西丸震哉著『滅びの大予言』p.152より



山本譲二

歌手

平成2年(1990年)2月20日。その日、山本は珍しく仕事が早く終わったので、3歳になる娘さんと遊んであげようと思い、早めに家に帰った。

帰りついたときはまだ日の落ちない夕方だった。山本は、娘が夕焼けが大好きだったことを思い出し、それを見せてあげようとマンションの窓を開けた。そして夕焼け雲を見ているうちに、そのなかにキラキラと光るものを見え、目の錯覚ではないかと何度も目をこすってみたが、絶対に間違いない。

「おい、ちょっと来て見る」

急いで奥さんと呼んだ。彼女もその物体に見入っている。

「ひょっとしてUFOじゃないかしら」

奥さんは呆然としたままつぶやいた。

「大変だ。ビデオに撮らなくっちゃ」

大あわてでビデオカメラを持ってきて、その貴重な一瞬をビデオに取めた。時刻は午後5時30分ごろ。このときのビデオテープは貴重な記録として今も大切に保管されている。

「別冊週刊実話」2003年9月1日号 p.49より



山瀬まみ

タレント

彼女は超能力があるのか、今までにたくさんのUFOを見ている。いちばん最初に見たのは、彼女が小学生で父親の転勤にともなって一家で山形県に行ったときのこと。

当時、山瀬たちは会社の社宅に住んでいたのだが、ある夜、向かいの社宅の屋根の上に真っ赤な炎のようなものが現われた。

「オレンジっぽい赤で、とてもきれいでした」

それはとても大きな物体で、屋根全体が真っ赤に染まって見えるほどだった。それは彼女だけでなく、家族や社宅の多勢の人も目撃している。

「あれは、なんだ」と、みんなが大騒ぎをしていると、その物体は左右にゆらゆらと揺れ、そのうちに音もなく急に消えてなくなった。

「あとはまた元の真っ暗闇で、まるでキツネにつままれたみたいでした」

そのことは一度だけでなく、その後も何度も続いたが、その正体はいまだに不明だという。

別冊週刊実話 2003年9月1日号 p.49より



英国王室エディンバラ公

「私は空飛ぶ円盤が実在するものであることを確信しています。あらゆる証拠がこれを証明しています。世界中のきわめて多くの人々が、すでに円盤を目撃しています。諸君もぜひ円盤研究をすべきですね……」

1962年頃、エリザベス女王主催の晩餐会の席上、参席の友人たちに話した言葉。



エリック・ゲーリー
元グレナダ国首相

「グレナダが自國に直接関係したとて、世界の発展に直接関わる問題ではなく、なぜこのようなUFO問題に熱心に取り組んでいるのだろうかという疑問をお持ちかもしれませんが、世界中の國々は、それぞれ自國に利害関係をおよぼす国際問題にのみとらわれていて、地球がひとつの惑星であることを忘れておられるように思われるからです。」

1978年11月27日開催 国連第35回特別政治委員会における演説より



H・C・T・ダウディング卿
元英国空軍長官

「空飛ぶ円盤は実在する」
「空飛ぶ円盤」が米國のレーダーに映ったことがある。一度などは三つのレーダーに同時に映ったことすらあったが、その時速は真に九千マイルという怪速力だったと記録されている。現在のところ我々は、この様な速度で空中を飛び、その速力から来る加熱はもちろん離陸、旋回、着陸などのさい生ずる加速に乗務員が耐え得るとは思えない。従って、私は「空飛ぶ円盤」の実在は信じるが、それが米國とかソ連とか、世界のどこかの國で製造されたものとは考えない。つまり私は「空飛ぶ円盤」がどこか地球以外の所から飛んできたものだという説をとる以外に考えようがないのである。

我々は恐らく今後十年以内にロケットを月まで飛ばすことが出来るようになるだろう。百年もたてばロケットにパイロットを乗せて月までの往復旅行が出来るかも知れない。五百年のうちには、比較的距離の近い星まで行き着くことも考えられないことはない。一体我々は、他の天体の住人たちが科学研究の分野で我々より五百年くらい進歩しているということを真向から否定してかかるほどうぬぼれとよいものだろうか。

私は「空飛ぶ円盤」に乗ってくる訪問者たちの大部分が、友好的で善意に満ちた動機からする訪問者だと信じている、とっておこう。もっともその証拠はそれほど多くはない。しかし証拠のほかに、可能性というよりむしろ合理性という点で私の考え方を裏付けてくれるものがある。それは、他の天体の住人たちが、我々には未知な自然の力を利用するという点で我々より遙かに進歩しているとするならば、当然精神的発達という点でも我々より進歩しているだろうし、したがって意見の合わないものを殺すよりも、自分たちのもっている精神的な所産をいっそう広く分け与えようとするだろうということである。」

1954年8月29日 神戸新聞夕刊より



L・M・シャサン大尉
元NATO所属中央ヨーロッパ空軍防衛本部総司令官

「当面の問題としては、國際的にUFO目撃報告を確認出来る組織を作る必要がある。事態は人類にとって正に重大である! 限られた手段しか持たない民間の研究者が、これらの事業を担当する時代はすでに過ぎた。今や各國の政府がこの問題の解決に協力する必要を認めなければならない。……UFOを敵の大陸間弾道ミサイルと誤認することにより、破滅的な戦争に突入する愚をさけるためにも、UFO問題を真剣に検討すべき時期がすでに到来しているからである。」

これらUFOを自由に操るのはどんな知的生物であろうか?
…我々は、謙虚に、そして積極的に、地球以外の—それも我々からあまり遠くない—星に、我々よりはるかに進んだ文明を持つ生物が住んでいるという仮説を受け入れようではないか。我々は先験的に否定することはやめよう。そして事実に対しては慎重にこれを検討し、研究し、そして判断は最後まわしてもよいではないか。

1958年4月23日 仏UFO研究者エメ・ミシェル著『UFOとその行動』序より。

IN THIS ISSUE

p.1

中国大連の空飛ぶ円盤型展望台を背景にした台湾空飛ぶ円盤学会のメンバー達。

Members of Taiwan UFOlogy Society(TUFOS) against the background of flying saucer type observatory in Dalian,China.

P.3

近年、メキシコの空中に、人の形をした物体がビデオカメラによって撮影されている。これらは「空飛ぶ人の形」と呼ばれている。

The object to have person's shape is taken of a picture in the sky in Mexico with the video camera in recent years. These are called "Flying humanoid".

「空中の人間」、我々は、この現象について思い巡らす時、聖書の言葉を思い出す。

"Man in the sky":When this phenomenon is thought over,we recall the word of the Bible.

"Then I saw another mighty angel coming down from heaven,wrapped in a cloud, with a rainbow over his head, and his face was like the sun, and his legs like pillars of fire." [REVELATION 10]

"After this I saw another angel coming down from heaven,having great authority;and the carth was made bright with his splendour." [REVELATION 18]

Photo from "NIEZNANY SWIAT",provide by Robert K. Lesniakiewicz

新約全書 第十章 我又看見另有一位大力的天使、從天降下、

披著雲彩、頭上有虹、臉面像日頭、兩腳像火柱。



Illustration by Yuki Amamiya

新約全書 第十八章 此後、我看見另有一位有大權柄的天使

從天降下地就因他的榮耀發光。



Illustration by Yuki Amamiya



Quetzalcoatl told the second coming in Mexico:

Aztec historians never forgot about Quetzalcoatl, who gave them moral laws as well as learning. Wise and merciful, he gave corn and other food to men and animals and advised them to offer to gods not sacrifices but fruit, bread and flowers.

メキシコに再臨すると伝えられる神Quetzalcoatl:

アステカ族歴史家はQuetzalcoatlを決して忘れませんでした。(Quetzalcoatlは知識と同様に法律を彼らに与えました)。彼は賢明であ、慈悲深い方です。彼はとうもろこしと他の食物を人間と動物に与えて、犠牲ではなく、果物、パン、および花を神に勧めるように助言しました。

P.8

We dug up historical UFO data from the historical books / legends dating back to a few centuries AD. We also spent many hours and days to collect and analyze ancient archeological data. During our activities, we encountered UFOs many times. UFOs appeared in the sky above us, including very small UFOs which approached to us very closely. We believe that these are the sophisticated probes. According to these experiences, we were convinced that the UFO side knows us and our society very well.

In the 1960's, the nuclear connection issue became an urgent and important activity for our UFO research organization. "SAC (Strategic Air Command) and UFOs", "The Blackout in US and UFOs", "Vietnam War and UFOs", "The Seventh Fleet and UFOs"; these issues were investigated and the articles were publicized in the 60's already. We realized that the nuclear issue is the one of the most critical problem for our world. Our former member and I attends the Hiroshima memorial ceremony and pray for a nuclear-free future each year.

私たちはいつかまでかのぼる歴史的な本/伝説の世紀からの歴史的なUFOデータを掘り起こしました。また、私たちは、古来の考古学的なデータを集めて、分析するために何時 間も何日も費やしました。私たちの活動の間、私たちは何回もUFOに遭遇しました。UFOは非常に密接に私たちにアプローチした非常に小さいUFOを含む私たちの上の空に現れました。私たちは、これらが洗練された徹底的調査であると信じています。これらの経験によると、私たちはUFO側が私たちと私たちの社会を非常によく知っているかと確信していました。

1960年代に、核接続問題は緊急の、そして、私たちのUFO研究組織に、重要な活動になりました。「囊(戦略空軍)とUFO」、「米国での停電とUFO」と、「ベトナム戦争とUFO」、「第7船隊とUFO」; これらの問題は調査されました、そして、記事は60年代で既にピーアールされました。私たちは、私たちの世界への最も批判的な問題について核問題がものであるとわかりました。私たちの元メンバーと私は、毎年、広島市のメモリアルの式に出席して、核兵器廃絶の未来に向けて祈ります。

1995年8月6日、私の友人K氏は広島市の平和式典に行きました。彼は、式典の前に会場の 平和公園から空を撮影しました。その写真の中に頭が青く、オレンジの尾を引く形が写っていました。

また、私は2005年8月6日に広島市の平和式典に参加しました。私は広島市長の「平和宣言」の朗読中、原爆ドームをビデオカメラで撮影しました。その映像に、ドームの上空を 反復運動する黒い物体が映っていました。これは、大型の鳥かも知れませんが、羽ばたきは見られませんでした。

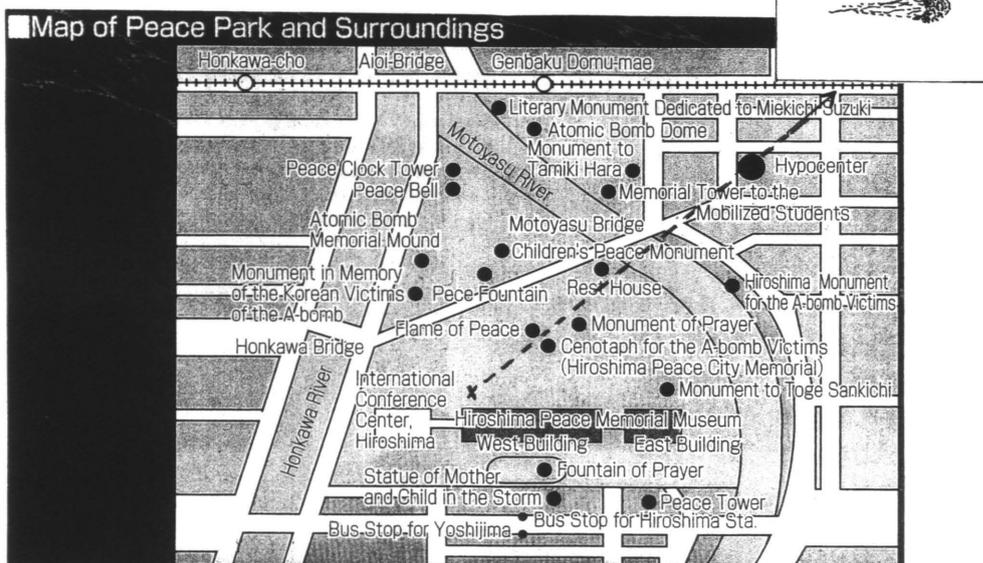
私は『THE UFO RESEARCHER』第50号で、核兵器とUFOの関係を特集する予定です。6月の発行を目指しています。

My friend Mr. K went to a peaceful ceremony of Hiroshima City on August 6, 1995. He had taken a picture of the sky from Peace Park in the hall before the ceremony. The head was blue, and shape that the orange-tail remains was reflected in the photograph.

Moreover, I participated in a peaceful ceremony of Hiroshima City on August 6, 2005. I took a picture of A-bomb Dome with the video camera while reading Hiroshima mayor's "Peace declaration" aloud. A black object in the sky over the Dome, reflection in the image was repeat. This might be a big bird. However, the flap was not seen.

I plan to feature the relation between the nuclear weapon and UFO in 'THE UFO RESEARCHER' No.50. I will issue this magazine in June.

Editor: Kiyoshi Amamiya



アンドレイ・サハロフ
旧ソ連アカデミー会員
(1975年ノーベル平和賞受賞)



「私は地球外文明との交流確立の試みを拡大するよう提案する……“外から”受ける情報は人間生活のすべての側面—科学技術に革命を促す影響を与え、社会的経験を交流するという意味で有益でありうる。」

1990年5月『今日のソ連邦』より



バーリー・ゴールドウォーター
元共和党米大統領候補の一人

「空飛ぶ円盤、UFOあるいはそれを何と貴方が呼称しようとも存在するのだ」

Flying Saucers-unidentified flying object -or whatever you call them-are real.

Barry Goldwater
U.S. Senator didate of the President



アルバート・M・チョップ
元米国防総省勤務空軍UFO情報担当者

「そのものを絶対に確信する。他の宇宙からの生物にわれわれは観察されているのだ。」

One thing is absolutely certain. We're being watched by beings from outer space.

Albert M. Chop
Former Air Force press official handling UFO information at the Pentagon



ゴードン・クーバー
元宇宙飛行士

「私は、地球よりも明らかに技術的に進歩している他の惑星から、宇宙船に乗った乗組員たちが、この地球を訪問していると固く信じています。

われわれは、地球上のあらゆる場所から、すべてのUFO遭遇に関するデータを科学的に集め、分析し、そして、いかにしてこれら訪問者と友好的な方法でもってあいまみえるのが最善かを決定するためのトップレベルの調整された計画を持つ必要があると思います。

まず、われわれが宇宙市民の一員として受け入れられるために、我々は諸問題を戦争という手段ではなく、平和的な手段によって解決したことを彼らに示す必要があるでしょう。

私は1951年ヨーロッパにおいて2日間にわたってさまざまなサイズのUFOが多数、東から西に向かって、編隊を組んで飛行していくのを目撃しました。そのUFO編隊は、当時のジェット戦闘機が到達できるよりもはるかに高い高度を飛んでいたのです。」

1978年11月27日開催 国連第35回特別政治委員会に提出された証言より

ウ・タント
元国連事務総長



U Thant and UFO's
---Drew Pearson---

(Today's column is by Drew Pearson and his associate, Jack Anderson.)
In the very middle of the Near East crisis, UN Secretary General Thant took time to do a very significant thing. He arranged to have one of the top advocates of the theory that flying saucers --UFOs--are from another planet, speak before the Outer Space Affairs Committee of the UN.

Interesting fact is that U Thant has confided to friends that he considers UFOs the most important problem facing the UN next to the war in Vietnam. U Thant made this statement before war in the Near East, so it's not known how he rates this last international incident compared with UFOs.

「UFO問題はベトナム戦争に次ぐ重大問題だ」
1967年6月27日号『ニューヨーク ポスト』紙より

「あなたもご存じのように、私は仏教徒だから、地球以外にも生物がいるということを感じますね」
「…われわれにとって、何十年に感じられる時間でも、ほかの者にとってはたった一日か二日でしかないことも考えられますよ」
1960年代、天文学者アレン・ハイネック博士とのUFO談話から



ヘルマン・オーベルト
ドイツ宇宙工学

「銀河系宇宙にはわれわれの太陽系とよく似た太陽系が在り、やはり多くの遊星をかかえている。まして幾百万という銀河系宇宙には地球と同様の遊星がどれほどあるかわからない。

従ってこの地球以外に高等な人類が存在する事は確実であるといえよう。
例えばUFO観測の事実と照らし合わせてみても、七万件以上の目撃例が挙っているにおいては、われわれはこれらの諸事実を看過することはできない。
つまり他の遊星から宇宙船が来ているという仮説はこのUFO目撃と矛盾しない、むしろその仮説を確証付けるものだ。」

1964年頃のフランス誌『Le Courier Interphne' taire』より抜粋



本田宗一郎
本田技研創業者

「…二年前ヒトダマの実験に一応成功を収め、次のテーマとしてUFOの謎を解明し、併せてそれを人工的に造り出せないかと思うようになりましたが、なかなか思うように運びません。

私のような技術量が解明することの容易でないことは十分承知しております。ネス湖のネッシー同様、人類の永遠のテーマ・夢としてナゾにつつまれていた方がよいかもしれません。」

UFO研究者F氏への書簡より

THE UFO RESEARCHER 予告
通巻第50号記念特集号「核とUFO」は
「核とUFO 問題資料集成 I」として
発行することになりました。

■中国の天文古記録について

古代中国の天文記録には、記録された現象が天のどの部分に始まり、どの部分で消えたかという経過を、豊富な星座名を駆使して記述している。

この状況をつかむ上で、まず中国における星座の命名方法が、今日使用されている古代ギリシャ起源と違う事を念頭に置く必要がある。

ギリシャの場合は、星と星を結んだ形を神話と結び付けたのに対し、中国では、ある「概念」を星に結びつけて星座とした。これは中国の天文学というものが、占星術つまり、天文現象を觀て人生の吉凶禍福を読む古代思想から発展したもので、星座を人間社会の組織に擬して自然、地名、人物、生活にある名詞を星にあてはめたからである。従って、たった1つの星で「星座」とするものも多く、また、肉眼で見える限界の星(5等星以下)を含めた星座や、逆に現在知られている明るい星を脱落させた星座もある。

従って、中国の星座を、今日知られている星座に当てはめるのは簡単ではない。それでも、古代現代を通してその名も変わらず、誰でも納得できる星座もある。その1つが「北斗七星」である。また、北極星は現在、小熊座のα星だが古代中国ではβ星で、天の北極を取り囲む紫微垣は中国古人の世界観「渾天論」の宇宙の中心であった。方位に関しては、後漢時代、磁石のもつ指南性(南北を指す)が知られていた。渾天儀(天球儀)も後漢時代の発明である。

日月に次いで明るい星、金星は「太白」と呼ばれ、木星は「歳星」と呼ばれた。恒星ではアークトゥールスが「大角星座」と確認されている。

天象現象としてのUFOが、古代人にとって意味のある星々の間を動いたというのなら、占星術的にその意味も知られていたであろう。本文を読めば、「文昌」で現れ、「紫微」で消滅というパターンに気づくと思うが、その意味を古代的に解釈することも面白いだろう。

しかし、UFO記録として見た場合、日本の古記録もそうだが「その長さ何丈」とか「何尺」といった表現は、実際とらえようのない数値である。月や太陽と比較すれば、誰でもすぐその大きさが判る。

だが、「車輪」や「斗」など日用品の大きさと比較した表現は、それが目と何メートル離れた時の大きさなのか、古代人の当事者に質問しなかり不明である。この件については、古文からの訳記者である張開基氏が詳しく述べておられるので、こちらを参考にして頂きたい。

■「微動する星」とは一体何か?

張開基氏は、「名のわからぬ移動する星」の記録を出現年月日のみの表で紹介している。1071年から1221年の150年間と、1388年から1600年までの約200年間である。

この天象現象は人工衛星に酷似している。ロケットが打上げられ無数の人工天体が地球を巡る現代では、星の間を星のような光がゆっくりと動くのを見たら、まず人工衛星と考えてよいだろう。それは直線的に(肉眼ではフラフラして見える場合が多いので、三脚に固定したカメラでバルブ撮影すれば、直線移動と確認できる)に移動する。それらはほとんど登録され追跡されて軌道が確認されており、軌道要素というパソコンへの入力数値リストが専門誌に毎月発表されている。軍事用秘密衛星は観測によって存在が確認される。しかし、突然軌道に出現して突然消失する謎の「衛星」も

11.

昔から知られており、それはまさに未確認衛星で、「15トンの黒騎士」とか名づけられて問題になるなど事件はあった。

しかし、人工衛星とは旧ソ連のスパウトニク(1957年打上げ)以後のものである。それ以前の地球には人工衛星などというものは存在しなかった筈だ。似たようなふるまいをするものが見られたならば、それは湾岸戦争時に軌道を変更し、イラクを集中偵察した軍事衛星のように、地上の出来事を定期的にデータを収録する目的をもつ地球外装置の可能性が高いと言える。

では、中国の記録にみられる膨大な量の「ゆっくり動く星」とは、果たして地球の引力にとらえられ、未知の力で衛星軌道にのせられた自然物体ではなく、機械のビッシリ詰まった観測機器、偵察装置なのだろうか。だとすれば、その目的は何か。

■「動く星」が現れていた時代とは?

まず、西暦1100年前後の中国をみると、この頃は宋(960~1279)の時代であった。神宗帝(位1067~1085)が王安石(1021~1086)を宰相に抜擢して、富国強兵策を実行した。また宋代は文化面でも一大転換期で、知識人の層が飛躍的に厚くなった。宇宙生成過程を図式化した周敦頤(107~1073)の「太極図説」が著わされた時代。UFO的な面では、天文・物理の天才的な学者沈括(1031~1095)をはじめとする多くの住民や旅人が目撃し続けた「珠」と呼ばれた飛行物体の出現時期(1056~1063)の直後にあたっている。

次の1388~1600年は何があったか。まず、中国では、貧農出身の太祖洪武帝建国の明朝(1368~1644)の始まりから、二代万曆帝までに当る。

英仏は百年戦争(1339~1453)。スペイン、ポルトガルなどの大航海時代となり、その発見航路は「ジバング」にも延びる。日本は戦国時代から立直り、織田信長(1534~1582)による統一から、国際社会参加へと移っていく。日本はインカの如く亡びず世界を学び、視野を広げる。

■月は「動く星」の寄留地として観られた

張開基氏の分類では特に抽出されなかったが、現代のUFO研究者がUFOの起原を論じる際に引用される「月面発進」および「月面帰還」の飛行物体が記録されていることは重要である。

「月に入る」光物が6例。「月に入り、しばらく後出ていく」のが2例、月から出る光物群が1例みられる。見掛け上、現象の背後に月面があったという考え方もあろうが、そのモノは自らの「寄留地」を暗示するかの如き振る舞いである。



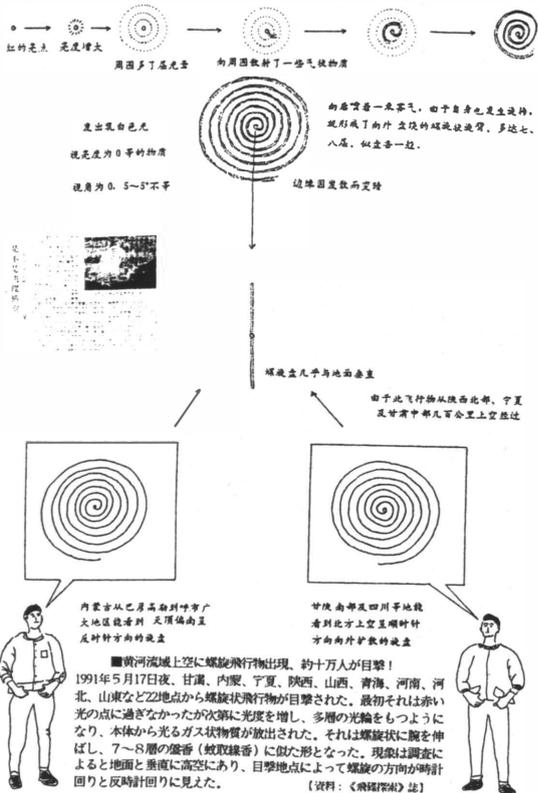
56便は管制塔を呼び応急措置の指示を仰いだ。緊急事態だ。しかし、2つの小飛行物体は一つになり、急速に上昇し方向を変えて飛び去っていった。

この時《新民番報》に届いた目撃報告を総合すると、目撃地点は崇明島上空、長江上空、經宝山鋼鐵工場、上海市区、上海外灘、虹橋空港などとなる。

■黄河流域上空に螺旋飛行体が出現、約十万人が目撃！

1991年5月「日夜」、典型的なラセン状飛行物体が多数の人々によって目撃された。この地点から目撃報告があり、主なところでは甘肅、内蒙、宁夏、陝西、山西、青海、河南、河北、山東など黄河流域で、目撃報告は各地方新聞で報道された。

最初、天頂に赤く明るく光を放つ点が発見された。それは人工衛星の通過のようだったが、大変速く、消失していった。約1分後、ある郡の子供が光った細かい点を発見した。最初それは見えにくかったが、輝きを増し、かつその周囲に多層の光輪を生じ、かすかなガス状物質を周囲に放射した。これは3時5分まで絶え間なくつづいた。人々はこの変化に驚かされた。光体の見かけは0等星の明るさで、次に一束の霧となり、それが回転しぐるぐると腕をのびし、7-8層の「盤香」に似た形、つまり蚊取線香状を形成した。それは乳白色を放し、輪の縁にきて暗くなった。飛行体全体は東から北西へ移動。この時2時50分頃で、ほとんどの目撃者がこれを見た。



■黄河流域上空に螺旋飛行体出現、約十万人が目撃！
1991年5月17日夜、甘肅、内蒙、宁夏、陝西、山西、青海、河南、河北、山東など22地点から螺旋状飛行体が目撃された。最初それは赤い光の点に過ぎなかったが次第に光度を増し、多層の光輪をもつようになり、本体から光るガス状物質が放出された。それは螺旋状に盤香を伸ばし、7-8層の盤香（蚊取線香）に似た形となった。現象は調査によると地面と垂直に高空にあり、目撃地点によって螺旋の方向が時計回りと反時計回りに見えた。
【資料：《飛翔探報》誌】

10.

■注目されはじめた古代中国のUFO記録

12月「日夜」毎日テレビの「世界・ふしぎ発見」で中国宋王朝が取り上げられ、「UFO大接近のなぞ」として沈括の目撃記録の再現が放映された。沈括（1031-1095）とは、北宋王朝時代に活躍した多才多芸の学者で、天文学、数学、物理学、地質学、医学に卓越した業績を遺している。彼は中央政府の「司天監」の官員に任ぜられ、天文観測や曆法の制定にたずさわっていた。

沈括のUFO体験は、彼の著書「夢溪筆談」に記載され、同一事件と考えられる記述が清代の名著「古今圖書集成」にもみられるという。

沈括の体験年号は嘉祐（1056-1064）。場所は揚州（江蘇省江都県。蘇州と並んだ観光地）で、その現象は「揚州に一珠有り甚だ大なり」と表現されている。当地の人々は空の暗い時いつでもこれを見る事ができた。最初にそれが現れたのは天長県で、転じて鹽社湖に入り、また後新開湖に入って十余年、住民や旅人はこれを常々見ることが出来た。詳しくは原典を読んでいただきたい。

1988年2月号日本版「サイエンス」は、あの開洋丸事件体験者の一人永延幹男博士とのインタビュー記事で、永延博士が中国の古記録を読んで、体験発表への意を強くしたことを述べておられる。貴重な発言である。以下に引用してみよう。

「サイエンス誌」-「そう決心されて、原稿を書いている時に、さらに意を強くするようなことがあったのか……」

永延「今年の5月5日の朝日新聞に「蘇東暉はUFOを見た？」という記事が掲載されていたのです。これは、約九百年前の蘇東暉の詩、および同時代の政治家で科学者でもある沈括の残した記録から判断して、二人とも同じUFOを見た可能性が高い」という上海紙の記事を紹介したものです。それを見て、「僕たちが見たものが、今は否定されても、活字にしておけば、さらに科学が発展した二百年後か三百年後、それこそ九百年後でも、改めて検討する人が現われたときには資料を提供できる」と思い、原稿を書くつもりになりました。また同時に、きちんとしたものを書かなければならぬとも思ったわけです。そういうわけで「きちんとした形で活字として記録に残す」ということが、僕の今回の最大の望みだったので。

UFO研究とは、UFOの「実物」を試料にして分析したり試乗したり出来ない点が従来の「学問」とは壁を隔てて孤立する原因になっている。

「UFO研究」とは言っても、他人の目を通して見た現象の痕跡（目撃談、目撃図、目撃記述など）と、それらしい資料（写真、ビデオ映像など）を相手にするしかないのが現状だ。無論「自らそれに接近する」という分野もあるが、希望があるから実行できる、という保証のないのが特徴である。文献資料も過去の人間がとりもつ実体への接近である。現代のUFO情報に満足できない研究者は、徹底して過去の文献におけるUFOの痕跡を探り当てるのも一つの「研究」の在り方だろう。記録が勝るによる改ざんの手が加わらない限り、それは人類最大の遺産であり、文明発祥と同時に文字を発達させた民族はその点有利な立場にある。

CBA International magazine published what they obtained in the first UFO photographs taken in China. He stated that his colleague visiting China at that time was a Chinese merchant living abroad. Again we stipulate that our reproductions are taken from photographs. The original caption is appended.



"UFO over People's China!"
"A strange object loomed over the suburbs of Kaiding, Henan province, China, according to the testimony of October 28, 1961, watched by several people. The object appeared low in the sky and occasionally moved slowly and sometimes was almost stationary. They stopped work and passed up the mountain Ching Chang-tai, a young engineer, managed to snap a few pictures with a camera. They watched it for about 7 minutes, until it disappeared out of sight."

UFO Fever!
The English-language edition of the Tokyo Asahi Shimbun of Saturday December 6, 1960, carried a UPI item from Peking which reported that:—
"The official Chinese news agency said Thursday that people on all levels of life have been gripped by curiosity toward unidentified flying objects."

周りの青白い光のハロの直径は、もうさくさく位になった。”
“この時、私たちはまた青白いハロの後部にハッキリしない様なもやもやとした尻尾があるのを発見した。”
“私たちは地上の指令センターに報告しながら、発光体を監視しつづけた。”
緊急着陸の準備もした。

発光物体が飛行コースの近くに迫ってくると、青白い光のハロは外へ外へと拡散するのを感じた。
そして光の輪がだんだん見えたり、見えなくなったりしていた。
真ん中の明るい点も消えていた。

操縦室の右側から眺めると、右側の空は相変わらず明るい。
約30秒経ってから、空の様子は正常に戻った。”
“この発光物体が現れていた間に、我々には何の異状も感じられなかった。”
地上との通信連絡もずっと正常を保っていた。

あの時、私がついでに一枚のスケッチを描いた。
簡単な形と位置を記したものだ。”
王機長が私たち（記者）に
“発光物体を発見した後、我々乗務員は、蘭州軍区管制と北京軍区管制に連絡をとった結果、当時この地域に他の飛行（物）の活動はなかった。”
ですから、あれは一個のナゾの飛行体（UFO）であると判断した。”
彼はまた、こう言った。

“3年間に近い飛行生活の中で、この様なものを見たのは初めてである。
本当に残念なことは、あの時手元にカメラがなくて写真を撮れなかったことだ。”
そう言いながら王機長はテーブルを軽く叩いて、如何にも悔しかった気持を表した。
別れる時に王機長は、また私たちに
“この定期便の別の乗務員班が、あれから一周間後に同じコースを飛んだ時、新疆のロプノール南方上空において、再びナゾの飛行体と正面遭遇した。”
と語った。

【中國新聞社北京九日電】據人民日報（海外版）今天報導，中國民航CA 903 航班六月十一日在飛行中，發現一個不明飛行物（UFO）。
該航班機長王雲亭在接到目擊這一飛行物的消息後，當天他們在飛過內蒙口、距離僅有幾百公里的內蒙上空，發現一個不明飛行物。該物體呈圓形，直徑約有四十至五十公里。
這位機長說，他們一邊向地面調度報告，一邊監視發光物體，做好了緊急降落的準備。在發光物體接近航線後，機長下令飛機向外擴散，光線向外散開，中心亮點也消失了，空管人員也失去了聯繫。又過了約半小時，天空恢復了正常。

内蒙上空 萬米高度 中國民航班機 近發現「UFO」

一周後在羅布泊上空亦發現

【中國新聞社北京九日電】據人民日報（海外版）今天報導，中國民航CA 903 航班六月十一日在飛行中，發現一個不明飛行物（UFO）。
該航班機長王雲亭在接到目擊這一飛行物的消息後，當天他們在飛過內蒙口、距離僅有幾百公里的內蒙上空，發現一個不明飛行物。該物體呈圓形，直徑約有四十至五十公里。
這位機長說，他們一邊向地面調度報告，一邊監視發光物體，做好了緊急降落的準備。在發光物體接近航線後，機長下令飛機向外擴散，光線向外散開，中心亮點也消失了，空管人員也失去了聯繫。又過了約半小時，天空恢復了正常。

11th Aug. 香港文匯報

9.

■瀋陽上空に飛来した洗面器形UFO！
1989年5月17日の夜7時5分頃、朝鮮半島に近い清朝発祥の地、遼寧省の省都であり重工業都市瀋陽に謎の物体が飛来した。
『飛探』に報告を寄せた陳詳君氏は工場の同僚が目撃した物体について、こう説明している。

「5時5分、2人の同僚がすごく緊張した面持ちで私の家へ駆けこんで来た。話によるとたまたま今、ハッキリとUFOを見たのだと言う。その経過は次の通りだ。
最初、西北から東南方向へ1個の光体が飛行しているのが見えた。それは、非常に速いスピードで彼の頭上に来た。その時、スピードが落ちて洗面器のような外形をもつ光体に見られた。ピンク色で、下部から火を出し、その火は長く尾を引いていた。音は全然なく、高度は推定二千から三千mくらい。東南へ飛行しつつ次第に小さくなっていった。その時、光体は前後2つになって、遠方に去った。」

目撃時間は5秒くらい。天候は良く、気温は零下9度位。空には一つの雲もなく、満天の星空であった。我々の工場は瀋陽の南部郊外にあり、視野が広い。工場の東にキロには桃仙飛行場がある。我々には色々な飛行機の情報が入るので、UFOと飛行機を見間違えることはない。」

■上海上空で円形と長方形物体の飛行、航空機からも目撃
1991年3月28日の午後の勤務時間が終わった頃、上海上空に長く尾を引いた「飛探」が飛来、多数の市民や航空機から目撃された。以下は『飛探』に掲載された周立飛氏による目撃報告の概略である。
「1991年3月28日5時5分、ふだん通り中山北通りから路バスで家へ向かった。私が東新路を歩いていた時、十余人の人が上を見上げていたのを見た。私もその視線、仰角が度付近の空を見上げた。すると、一個の巨大な尾を引いたものが飛んでいた。慧星のような尾で、頭部は球体だった。色は金色。長さ直径の比率は5対1位。光体の光がパッと光った。目撃者達はこの光景を大変喜びながら無言でじっと見つめていた。目撃者達は、その様子を新聞社に報告した。」

10時5分にこれを目撃したある小学一年生は、母親に話しても信じてもらえないので『新民晚報』に報告した。
6時5分には外灘等の地区から通報がひっきりなしにあった。
上海市の西郊に位置する上海虹橋空港の管制塔の係官は、6時5分、空港西北上空2000メートルに、一個のオレンジ色の楕円形光体を目撃した。それは垂直状から「一」の字形になった。当時、済南へ向けて飛行中の定期旅客機5556便からも空港管制塔管制官へ目撃報告の連絡があった。

その光体は高速で、尾部の噴射が赤く輝いていた。飛行機は光体の後ろについて飛行していたが、突然、黄色い光が黒くなった。そして円形と長方形の形に分離し、2つの小さい飛行物が出た。2つの飛行物はお互い200メートルの距離を保っていたが、たちまち東、あるいは西に方向を変化させ、方向が定まらなかつた。

機が蘇州上空を飛行中、物体は移動し頭を飛行機に向け高速で向かってきた。55

■1985年6月2日、中国民航ジャンボ機が巨大UFOと遭遇

この年の8月中旬、大阪日本橋の現金問屋に勤めていた頃、同僚の若い女子社員が目を輝かせて話しかけた。「知ってる？車でラジオ聞いていたら、中国で大きさがギョロもあるUFOがでたんだった。飛行機から見えたって。」

「そんなバカな、4キロの大きさの聞き間違いじゃないのか？」私はその女子社員に言った。しかし彼女は「いいえ、確かにギョロからギョロの大きさだって言ってます。それから、厚さがギョロですって！」

私はこの信じられない情報を確認するため、取り合えずやはり同僚の、中国人と結婚したR夫人に「中国でUFO事件があったそうだが、何とか新聞記事を取り寄せてくれないか」と依頼した。

一周間ほどたつて、その夫人から中国の友人から送られてきたと言って記事のコピーを受け取った。彼女の友人は、よほどの情報通らしい。日本でも、「いついつ起こったUFO事件の新聞記事を見つけてくれ」と誰かに頼んだとしても、そう簡単にはいかない。

7月28日付『人民日報』、8月9日付『人民日報』、8月22日付『香港文匯報』、8月2日付『香港大公報』、などがR夫人から提供されたものである。信じがたいUFO事件は、6月2日に発生していた。

8月4日付毎日新聞も、余録欄でこの事件に触れている。

「未確認飛行物体」などと堅苦しくいわないでも、UFOで通っている。その英語の発音にあわせて、中国語では「遊浮（ユーフー）」だ。空中をフラフラするナゾの物体らしい。しゃれた翻訳である。▲その「遊浮」に中国民航機が蘭州上空一万メートルで遭遇したと先週の人民日報が報じていた。楕（だ）円形で厚さ一〇キロ、長さ四〇一五〇キロの巨大な飛行物体。色は卵白色で、光圏は三層に分かれ、高速で北から南へ飛び去ったという。正体はもろく不明、夏向きのスリラーだ……

『飛隼探査』の編集者が読んだら気分を害するかと思うが、日本におけるこれが、中国民航機巨大UFO遭遇事件の一流紙の報道である。

原文を読めば、「光範囲有四十至五十公里（キロメートル）」とあり、それがUFOの実体の大きさを示していることは分かる筈だが、新聞社の翻訳者はよほど慌てていたものとみえる。

とにかく、これで疑問は解けた。光の範囲ならば、深夜の街全体が真昼のようにUFOの光に照らされた事件も過去にあり、「信じられない」という現象ではないのである。しからば、この事件はいかなる経過を経て発生したのか？

『人民日報』の第一報によると、遭遇機は北京発パリ行きジャンボ機CA933便で、遭遇時刻は北京時間2時5分。遭遇地点は東経103度30分、北緯39度30分の上空一万メートル。

最初、乗務員が機の右側に巨大な不明飛行物を発見。形状は楕円形で、光の範囲は三層。厚さ約二キロで、中心に強く光っている点があり、その光圏は三層。藍色を呈し、速度は非常に速い。北から南へ飛行機と平行して飛行し、その状態は約2分続いた。……これが、遭遇のおおまかな状況である。

『人民日報』第2報は、記者が直接機長王書亭氏にインタビューした内容が掲載された。UFOと遭遇した機長にインタビューできるのも、単に記者個人の権限ではないだろう。やはり航空関係者によるこれまでのUFO問題に対する積極的な姿勢、例えば米国内在住の林氏訪中の際にみせた動きと、市民からの要望が効力を発揮したものと

8.

いえようか。表面下の動きは知る由もないが、米パンナムのウィリアム・ナッシュ機長が12秒間のUFO遭遇を日本語にして三千五百字にもわたり報告して以来の画期的出来事である。

以下に紹介するのは、札幌に本部をおくUFO研究者グループ「Aero-1 Space」が中国領事館（札幌）に翻訳を依頼して得た全文で、筆者に提供されたものである。

■UFO遭遇の王書亭機長とのインタビュー「私達が見たUFO」
人民日報海外版記者 高常筠 馮軍軍

人民日報海外版7月28日、中国民航CA933便の飛行機が蘭州地区上空でナゾの飛行機を発見したとのニュースを報道したのち、内外の読者の興味をひきおこした。人々はこの広い空で瞬間に現れたり、消えたりする“自由の神”に関心をもち、もっと詳しいことを報道する様にとの意見が寄せられた。

このために記者が、この神秘的なナゾの飛行機を2分間も飛行コースから目撃した者の一人である、民航CA933便の機長王書亭から取材した。

記者が中国民航の飛行大隊を訪ねた時、王書亭機長は丁度ヨーロッパから北京に戻って来たばかりでした。

2年間にわたるパイロット生活から、彼の振る舞い、話し振りはすっかり飛行中の習慣が身に付き、行動が機敏で落ち着いており、言葉も簡潔明瞭である。

私たちが取材の主旨を聞くと、即座にパイロット独特の言葉使いで「目撃者の陳述」を語り始めた。

「私たちのCA933便のボーイング747は、6月2日北京からパリに向け出発した。

あの夜、離陸してから西へ向かって内蒙古の中西部に達した後、機体を一万メートルに上げた。

その時は夜間航行ではあるが、気象条件は非常によく、飛行機は時速900キロでの安全航行だった。」

「内蒙古の磧口を通り過ぎて、雅布頼迄にまだ37キロ離れた地点で、左側に座っていた操縦士の席、錦裕が右側の空中に非常に明るい一個の物体を発見した。

時刻は北京時間2時5分。私は右側を向き眺めると、飛行機右前方320度の方向のところに一個の光点を見た。

私の十数年間の夜間飛行中に見た星よりも明るく、物体は黄色で閃光（ピカピカ光る）を幾分か発した。見たところクルミ大位の大きさであった。」

「約2秒後、私はこのピカピカと光っている光点の周囲に楕円形の青白い光のハロ（ぼやけた輪）を見た。

直径は大体一メートル位。飛行機に面した方のはかなりハッキリしていたが、後部の方は比較的よわく（うすく）ハッキリしない。

最初私たちは、それが飛行機と同じ高度だと思っていたが、後で近づくにつれ、私たちの目測では、その高度は大体一万五千〜二万メートルの間であった。

側面から飛行機の航行コースに接近している。距離がだんだんちぢまるにつれ、発光物体の真ん中の明るい点ますます大きく見えた。

見たところでは、大人の握り拳位の大きさはある。

■雲南天文台研究員、螺旋現象を予測

1981年7月2日夜、中国全域に近い範囲でラセン状のUFOが目撃されたが、この出現を予測した人がいた。雲南天文台の研究員で、4年前の夏にも同様の現象を目撃していた張周生氏である。

UFO出現を予測する？—そんな馬鹿な、という前に、米空軍UFO調査機関時代のルッペルトが記した似たような話を振り返ってみる。

1952年7月2日深夜と3日深夜の2回にわたるワシントン上空に発生したUFO集中出現事件。レーダー面UFO事件である。

ルッペルト手記によると、ワシントン事件の前、彼はある科学者と会い、近いうちにワシントンがニューヨークでUFO事件の親玉のような大事件が発生する、との予言を受けたという。また「UFO報告の特殊な趨勢」に関して「プロジェク・ブルーブック内でもペンタゴンでもこれをつかみ口にして」と記している。ここでいう予測とは、流星群の予測式に、「物体群の宇宙軌道が何日後に地球軌道と交叉するため、大量の物体集団が地球にやってくる」というものではないだろう。たぶん、UFO現象の渦中に身を置いている者のみが、理窟ではないUFO側の「飛来意欲の「高揚」を察知できたのかも知れない。相手が「知性」ならば、その行動に自然現象のような不完全な規則性を期待するほうが無理というものだ。むしろ、自らが相手の懐に飛び込むことで相手の意図を察知し、次の行動を読み取るという理窟のほうが合点がいく。だが、張氏の場合は特殊な天体現象（流星の一種と考えている）としてのとらえ方から、堂々と予測を発表しようである。

さてとにかく、UFO出現予測という問題を中国UFO界に登場させた雲南天文台研究員張周生氏の場合はどうだったのだろうか。

「飛碟探索」1981年第6期に掲載された王昭氏の「7月2日UFO事件と張周生の予測」によると、UFO予測者張氏は、こう述べたという。以下、「UFOと宇宙」誌1982年6月号記載林文偉氏の報告から引用してみる。

「1981年7月2日から3日までの間に、UFOの活動が強まり、とくに7月2日から3日にかけて、UFOの出現する可能性がさらに大きくなる。その時には、中国の各地でUFOが見られるであろう。」

このUFOは、小さい場合には月の直径と近似し、大きい場合にはこれを超過するであろう。最大のものになると、月の直径の三倍に達するかも知れない。その形状は、小さいものは皿状をなし、大きいものは規則的な螺旋構造をなす。ゆるやかに自旋し、方向は時計と同じである。明るさは、月付近の照らされた層雲と同じようで、中心部はさらに明るく、かつまた中心核が見られる。昼出現したときは銀白色を呈し、夜出現したときは銀白色の間にいくらか他の色彩を帯び、中心部は色彩がもっと艶やかである。運動速度はゆるやかで、方向はだいたい朝は西から東へ、夕方東から西へ、夜は北から南へ向かう。出現する場所としては、夜はとくに北部天空を注意した方がよく、見える時間は二分間ぐらいであろう。」

この予測は「UFO予測報告」という正式文書で、中国科学院（科学アカデミー）雲南天文台張周生の名で、中国UFO研究会発行として各地のUFOグループに送られた。

各グループではその出現に対して準備をした。そして、果たして7月2日午後3時0分、北極星の付近に1個の光体が出現したのである。その光体が螺旋を描きつつ一条の尾光をばき出し、それが中心の光体のまわりをまわって、ゆっくりと進む、とくろを

7.

またた竜のような形になった。

その螺旋は四川省で目撃し写真撮影にも成功した吳志宏氏によると、毎分5回づつ回転していたという。螺旋の光跡を維持したまま、それは北斗七星を通過した。この光体は藍白色に輝く光の環をもち、その中心はとくに鮮やかで、5、6層になっている光の環の外側は、淡い赤紫色の光茫が幾重にも取り巻いていたという。

■十の省で百万人以上が螺旋状UFOを目撃！

7月2日夜の目撃は広範囲に及んでいた。新華社電が報じたところでは、チベットから最初の報告があった後、北京、新疆、内蒙古、寧夏、青海、甘肅、山西、四川、河西、湖北、雲南、貴州、安徽の各省、市、自治区の気象学者や目撃者から新華社に報告が寄せられ、目撃時刻は午後3時0分から2時0分の間で、1分間で消失したとのこと。四川省西昌市では、野外映画を見ていた三千人の人々が目撃したという。

この現象は3時0分前から5分にかけて四川省の吳氏によって写真撮影されたが、肉眼に見えた螺旋の光条を感光させるには至らず、わずかに中心部と思われる楕円の光が写っていたのみであった。この写真が何ミリのレンズで、感度がどの程度のフィルムを使用したのかのデータが明確でないが、露光は7秒から5秒と発表されており、三脚に固定して撮影したものでないが、貴重な写真と言えるだろう。

また、青海省の劉新寬氏も午後3時0分頃にそれを撮影している。やはり、回転する螺旋は写らず、棒状の光体が家屋の明かりのすぐ上空に写し出されている。やはり、写真データは不明だが、下に写っている窓の大きさからして超高空の現象というより低空に現れている光体の映像である。

四川省の理塘県では午後3時0分前から目撃され、北斗七星を通過するラセン物体の経路と物体の拡大を描いた目撃図が発表されている。古来「天帝」の乗物とされる北斗七星を通過している当り、暗示的である。

四川での観察によると、螺旋は北斗に接近する手前で、突然、中心部から東北方面に向かって一団の小さな光るものを噴出した。その小さな光は光体を取り巻く5、6層の環の明るい第1層の内層の縁を越える前に消失した。この現象は、UFO現象によく見られる母機からの小型物体発射を連想させる。果たしてこれは、真実の宇宙機なのか。同夜、雲南谷律鎮で現象を望遠鏡で観察した王丘政氏ら数十人は、発光体が「2つのシンバルを一つに合わせたよう」な形而上に窓がある一種の装置であることを見届けた。また、陝西華縣等の目撃者は「光は回転するに従って明るくなったり暗くなったりし、明るい時は特別に明るかった」と報告している。この出来事に対する中国UFO研究者の見方はかならずしもUFO説一辺倒ではないが、それゆえに、この事件は厳密なUFO現象研究に拍車をかけるものとなるだろう。

四川省UFO研究会の報告によると、この夜の中国最大のUFO現象は、目撃の範囲がこの省に達し、目撃者の数は数百万にもものぼるといふ。事実とすれば、大変な数字である。目撃者数とは、すべての国民にアンケートを配らなければ正確な数値はつかめないだろうが、目撃体験の有無にかかわらず、この事件の話題が中国全土を敵うほどの規模であったことは確かである。UFO事件は、たえず次のステップを提示する。当然、次に来るのは空中遭遇なのだ。

■台湾におけるUFO研究……

原子力科学者の「幽浮」命名から「神秘雑誌」まで
 中国UFO情勢変遷からしばらく目を転じて、台湾の動きに触れてみる。台湾といえば孤島のヤミ族の小漁舟「タタラ」に渦巻形を伴う人像装飾「英雄神マガマゴ」で知られている。パイワン族の芸術的な木製楯にみられる人々の頭上に配されたところを巻いた蛇の浮彫を見るたびに、渦巻きと大陸人の関係に思いを巡らせる次第である。さて、UFO研究家林文偉によると、台湾でUFOに関する認識が大眾の間に広まり、学会においてもUFOに対する関心が高まったのは1975年以降といわれる。この頃から原子力科学者でSF小説家、神話学者、アマチュア天文家でもあった呂応鐘氏が、UFOに関する翻訳本を出版。さらに月刊「宇宙科学」、隔月「UFOとSF」、単行本「UFO探索」などで啓蒙。呂氏によってUFOに相当する造語「幽浮」が考案された。先に紹介した中国民航機UFO遭遇の日本報道でもこの用語を中国のUFO語と取り違えて使用する程だから、当時としては有名な名称だったのである。

UFOを取り巻く世俗の反応の常として “保守・革新” の対立図式発生も、他国の例にもれず、台湾でもみることができた。

否定派の旗頭は清華大学物理学科教授沈君山博士、相対する肯定派の代表は呂応鐘氏であったが、女流作家の三毛女史が肯定派に加わるかたちで、1980年に「中国時報」で論争が展開された。（最近発行の張開基氏による「神秘雑誌」第5期によると、三毛女史はすでに故人となっている。）

1977年当時、呂応鐘氏はテレビや各大学でUFOに関する講演を行ない、台湾の人々にUFOに対する関心呼び起こす上で、大いに貢献したといえる。

ここで少し、羽咋国際シンポで発表された江博士の研究課題について触れてみたい。その課題は「易経」という中国の古いテキストと、生物の遺伝子構造の共通性について論じたものである。

我々日本人は、「占い」と聞くと「当たるも八卦、当たらぬも八卦」といった街角の大道易者をすぐ連想するが、これは中国古代からの「易」が中世の日本に伝えられて「算置」「占師」と変化して人相見と合流、大衆相手の職業となったもので、本来の易とはだいぶかけ離れているようだ。「易」とは、迷信的な呪術というより、卦の奥を読みとる一種の知的な解釈学であるとされている。

『易経』は儒教の五つの基本の經典の筆頭に置かれ、本文（経）は各種類の象徴的符号（卦）と、おのおのに付された短い占断の言葉から成る。

『易経』は本来占いの書であったが、十翼という解説の付加により陰陽哲学や宇宙論を備えるに至り、のちの中国人の世界観や人生観のみならず、自然学の分野にまで大きな影響を与えた。我々の使用する「眼光」「革命」「口実」「苦節」「大過」「君子豹変」などの語は『易経』に基づくものである。

『易』の語源は不明だが、人智を超えたものへの問いかけであり、厳粛な儀礼を伴うという。

くだいて言えば、人間界自然界に含まれる一切の要素が個体（占う相手）に働きかける要素を読むために開発されたものと言えるだろうか。

さらに、現代風に言えば、最近英国ミステリーサークルで注目された「フラクタル図形」、あるいはジェイムズ・グリック著の「カオス」にみられる非線形微分方程式のような、この世界を構成する「宇宙原理」とも言えそうな根源的法則性を人間の読

6.

める方程式に変換するイメージでとらえてみることもできる。

そのマクロの世界が、渦巻き状の巨大な星雲の宇宙構造であるとすれば、ミクロ世界は遺伝子や素粒子の世界であろう。

子がなぜ親に似るか、という問に答えを与えたメンデルの法則以後、遺伝子学は遺伝子の本体がDNAであることをつきとめ、分子遺伝学が発展した。あらゆる生物は外界から養分を取り入れて細胞単位で複製を繰り返していることにより、生命を維持されるのであるが、その遺伝子複製、同義語DNA複製にかかわる組合せの問題を、数構造の符号などで「易経」発生原理と関連づけたのが、江博士の要旨だと思う。

人間の歴史、また「運命」なる時間軸の渾沌は、計りしれず予測しがたいものだが、分子レベルでその決定権を握るのはまさしく遺伝子情報の世界である。生体の将来に発芽する情報の貯蔵、複製、転写、突然変異、修復が、我々の知らないミクロ世界で展開され、その結果として現実世界が進行するのである。それを知識として熟練し、読むのが「易経」の技術なら、両者の接点には歴然たるものがある。

江博士の論文は「神秘雑誌」第5期に「古い易」という古典は、生物遺伝の謎を解いた「易経」には遺伝因子DNAの秘密がかかれていた」と題して発表されている。また、江博士は「飛碟探索」5期に福岡の現地調査を含めた世界のミステリー・サークル現象の現状を寄稿している。

「神秘雑誌」5期には宇連におけるUFO着陸事件情報を呉偉翠氏の訳で掲載。同誌発行人でもある本書張開基氏の取材による羽咋市での宇宙とUFO国際シンポジウムをレポートした「UFO国際会議報道」や「羽咋神話・幽浮物語―飛碟的故郷―日本の羽咋市」と題した記事が掲載されている。

では、台湾省から再び中国本土に筋を戻して、少し年代を遡って中国UFO情勢の変遷を振り返ってみる。

遺傳暗號の易経解説

乾・巽	TTT ≡ (乾)	TCT ≡ (乾)	TAT ≡ (離)	TGT ≡ (離)
	TTC ≡ (乾)	TCC ≡ (乾)	TAC ≡ (離)	TGC ≡ (離)
	TTA ≡ (巽)	TCA ≡ (巽)	TAA ≡ (艮)	TGA ≡ (艮)
	TTG ≡ (巽)	TCG ≡ (巽)	TAG ≡ (艮)	TGG ≡ (艮)
	CTT ≡ (乾)	CCT ≡ (乾)	CAT ≡ (離)	CGT ≡ (離)
	CTC ≡ (乾)	CCG ≡ (乾)	CAC ≡ (離)	CGC ≡ (離)
	CTA ≡ (巽)	CCA ≡ (巽)	CAA ≡ (艮)	CGA ≡ (艮)
	CTG ≡ (巽)	CCG ≡ (巽)	CAG ≡ (艮)	CGG ≡ (艮)
兌・坎	ATT ≡ (兌)	ACT ≡ (兌)	AAT ≡ (震)	AGT ≡ (震)
	ATC ≡ (兌)	ACC ≡ (兌)	AAC ≡ (震)	AGC ≡ (震)
	ATA ≡ (坎)	ACA ≡ (坎)	AAA ≡ (坤)	AGA ≡ (坤)
	ATG ≡ (坎)	ACG ≡ (坎)	AAG ≡ (坤)	AGG ≡ (坤)
	GTT ≡ (兌)	GCT ≡ (兌)	GAT ≡ (震)	GGT ≡ (震)
	GTC ≡ (兌)	GCC ≡ (兌)	GAC ≡ (震)	GGC ≡ (震)
	GTA ≡ (坎)	GCA ≡ (坎)	GAA ≡ (坤)	GGA ≡ (坤)
	GTG ≡ (坎)	GCG ≡ (坎)	GAG ≡ (坤)	GGG ≡ (坤)

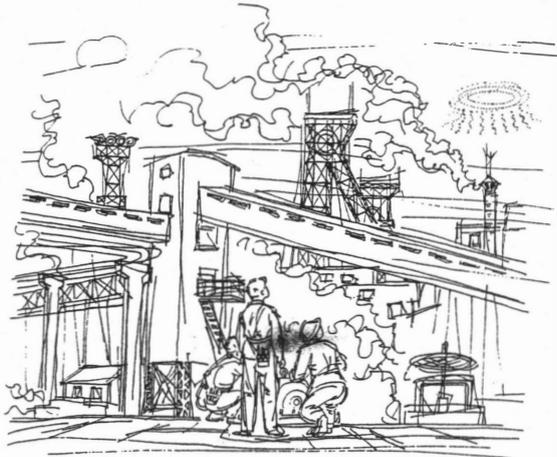
先天八卦図

張周生氏の目撃報告は3年後の1980年、北京の航空雑誌『航空知識』5月号に発表された。当然のことだが、これによって無数の航空関係者、航空マニアが自国のUFO報告に接して胸をときめかせたであろう。日本においても、『航空マガジン』誌に掲載された。空飛ぶ円盤情報は多くの航空ファンへの関心を円盤へと拡大させた。

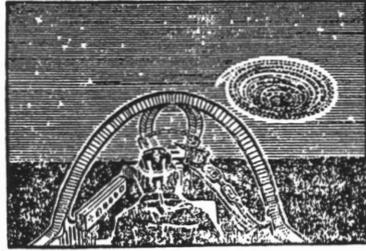
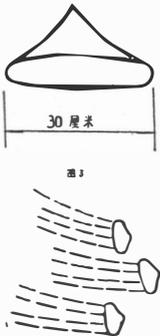
1981年6月、米国在住のUFO研究者林文偉氏は6年ぶりに故郷中国を訪れ、UFOファンを集めた講演会や座談会が各地で行なわれた。林氏が本場米国から携えてきた膨大な資料は、中国のUFO問題を一挙に世界レベルへと押し上げるほどの衝撃であったろう。彼の所持したUFO情報を目にしたマスコミ人の中に、航空界の大先輩が何人が出席していた、と林氏は述べている。

雑誌『航空知識』は、その後「米国UFO研究団体の代表、中国を訪問」と題して林氏のもたらしたUFO情報を掲載。林氏もたらした世界のさうさう種ものUFO研究誌、500枚ものUFO関連写真、海外の公立、民間のUFO研究組織が紹介された。

広大な大陸の住民に点じられた“UFO情報”の火種は、各界に浸透していったであろう。知識流布の後に起こるのは、知識を確信にまで至らせ、行動を促す「事実」の発生である。UFO現象と社会現象について考えたことのある賢明な読者なら、UFO事件というものがある、偶発的ではなく人民の心理変化と運動するかのような印象を持たれた方もあると思う。そこにはUFO出現という現象科学を越えた世界がある。個人が権力の鎖から解放され何者にも拘束されない“個”の確立を目指す時、それは同時に社会全体の単位としても、より広大な宇宙社会の招来の確率を高めることになるのかも知れない。



October 1970, 18:30, Shaanxi Province



5.

■ 1980年5月、中国初のUFO研究組織「中国UFO研究会」が発足!

中国で初の民間UFO研究組織「中国UFO研究会」が成立したのは1980年5月。武漢大学に本拠をおき、中国未来学会の指導のもとに、各地の科学技術協会の支持を受けて1年後450名の会員を擁するまでに発展した。

会員は、大学・専門学校以上の学力を持つ人が2パーセント、科学技術者5パーセント以上を占める。分会は、全国の省・市・自治区に分布。会員らは仕事の余暇にUFO目撃事件資料の整理と調査分析を行なう。1981年当時すでに国内UFO目撃報告を500例近くも収集整理したという。

5年後の1985年9月には、中国初のUFO研究会が大連市で5日間にわたって開催され計40の研究が報告された。

これは日本でも報道され、「中国では、UFOに対する関心は伝統的に高く、1940年天津市で世界初のUFO写真が発表されている。81年には、UFO研究学会も組織され、大学教授、科学者など約2万人の会員がUFOのナゾの解明に当たっている」としている。

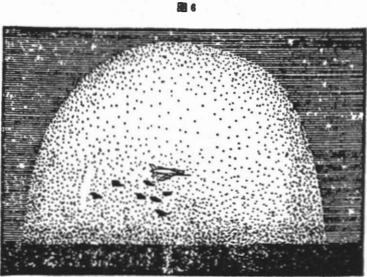
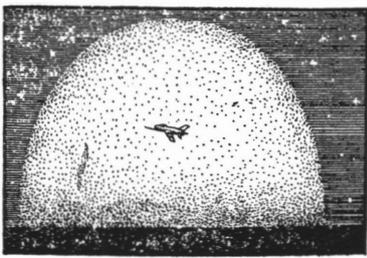
いっぽう、1981年にはUFO専門誌『飛碟探索』が発行されている。その内容は日本でも一部紹介されており、豊富な古記録を探索した真面目な研究姿勢は、本書の張開基氏にもみることが出来る。

二年間を振り返った中国UFO研究会の歩みについては、冒頭に紹介したように、『飛碟探索』第3期にまとめられている。この号には1977年にラセン形飛行体を目撃した張周生氏も「新奇的天文現象」として、自らの観察記録を基盤に自論を展開している。

1985年、南京師範大学物理系の学生、伍培云氏は卒業論文に飛碟の工学的研究を提出した。その論文の参考資料には『飛碟探索』が列挙されており、UFO誌が学生の卒論にまで引用される大陸の大らかさに驚かされる。伍氏は、UFOの出現空域の資料として、日本の航空機が空中で遭遇した高度別航空機から見たUFO目撃図を使用。また、出現分布図も日本のUFO研究団体作成の図を当てている。

1982年6月23日

1982年6月18日晚，我乘组织航展，我担任飞行指挥员。当晚是多云天气，在我观察的空域内为空白，开飞



飞行指挥员的叙述

一忽，我亦有空暇能轻松一下，便将视线从飞行指挥员计划航展上移向天空。我抬头，发现正前方的山脊上突然出现一条带状“怪云”，其边缘整齐，如同一个巨大的气球的顶部。我感到奇怪，天气一直很好，为何空中一云独现？如此特别，是否天气要变坏？在很短的时间里，这条“怪云”迅速矗立在我们指挥塔台前上方，顶部迅速展展下去，很快就要向我们指挥塔台压过来。“不对！这不是云！”用轻松的心情突然紧张起来。这时正准备返

■“怪物”から“飛碟”へ

国民性とは不思議なものである。八百万の神々と同居し、何にでも、“神性”を含ませようとする日本国民は“光り物”を見ると“神様が飛ぶ”と云う。別にそれが悪いとかの問題ではない。同じ国民でも、知識や経験その他の未知なる原因によって、同じ現象を目撃してもそれぞれ表現と対処が違う。雑誌『ワンダーライフ』連載「ヤオイさんちの宇宙人」で、藤平ひらと氏がそれを的確に表現している。地上付近を飛行する発光体を見て、老婆は“靈魂を見た”と言って心霊研究家に電話をし、同じ現象を見た大学生は“発光プラズマを見た”と言って大学の先生に報告。また同様にして労働者は“UFOを見た”とUFOディレクターに電話。のんきな主婦はそれを見て電球の買物を思い出す、というオチだが、現実にもよく似た出来事がある。

二人の子供が上空に出現した丸く黒い物体に驚いて凝視し続けたのに対し、発見して子供に教えた母親は、“気象の何か”と思っただけで家に帰った。しかし、その黒色円形物体は底部を回転させながら1時間近くも目撃者の頭上に停滞し続け、真っ赤な尾流を空に残して消え去ったのである。経験を積んだ母親がいちべつして既知のものとして即断。経験の浅い二人の姉妹が異常を感じてそれを観察し続けた。

以上は1972年2月1日午後2〜3時の間に、大阪府豊中市で実際にあった出来事である。

中国の事件紹介になぜUFOマンガや日本のUFO目撃をながながと述べたかという、これは機械ではない生き物としての人間が、異常な現象に出合った場合の表現や、その記録作業における“あいまいさ”について読者に理解を促すためである。

古代中国も二千年隔てた現代中国も、極めてよく似た習慣と感性の住民が継続して生活を営んでいると見て良いと思うが、彼らのUFO目撃報告を読むと、やたらと“怪物”の表現に出会う。

先の「光明日報」報の中国科学古人類研究所員の現地体験でも、所員に知らせてきた中学生は「空に怪物が現れた」と駆りこんできた。

また、「光明日報」に寄せられた報告の中にも、1979年7月8日夜明けに四川省で正円形の発光飛行物体を目撃した商業局勤務者は、物体の記述に“怪物”という表現を3回も使用している。

1958年夏に江西省で夜、円形の空中移動物体を目撃した体育委員は、同時に目撃した何人かの女性が「怪物だ！縁起が悪い！」と叫ぶのを聞いたと報告し、また自らも目撃した物体の報告に「怪物」という言葉を2度使用している。

中国語事典で「怪物」とは「(神話伝説上の)妖怪・化物」とある。たとえそれが本来機械的な装置であっても、人によっては生き物的な妖怪として報告し、書き記すのである。

台湾でUFOの音から「幽浮」と造語したことについても、「幽霊と混同される」という批判があつて、最近では「飛碟」を使用している様だ。UFOにすれば良いのでは？と言う意見には、米国在住の著名なUFO研究家林偉氏が「UFOとは何であるか識別しない飛行体のことをいい、飛碟とは、われわれがその形態を確認できる一種の飛行体のことをいう」と、UFOと飛碟を区別する必要を述べている。日本人にしても、空を飛ぶ円盤形の飛行体と確認できたなら、それは「空飛ぶ円盤」になるのである。

従って、古代中国の記録に「龍」が多数出てきた時、本当に“生き物”としての龍を指しているのかどうかについて、迷いが生じたら、本項を読み返して戴きたい。

4.

■民間から天文台に、そして航空界へ広まった中国のUFO熱

『光明日報』は、中国人民が1970年代になって、新聞やラジオで空飛ぶ円盤という“奇想天外な話”の存在を知るようになった、広く関心を引き起こし、次第にUFO目撃報告が行なわれるようになった、と書いている。

先祖伝来の素質はあるだろうが、西欧のUFO知識という先入観もなく、SF映画の影響による幻想的視野も少なかったであろう。“白紙”同然の人々に、ひとたび点火されたUFO志向の火は、野火のごとく燃え広がっていったのだろう。

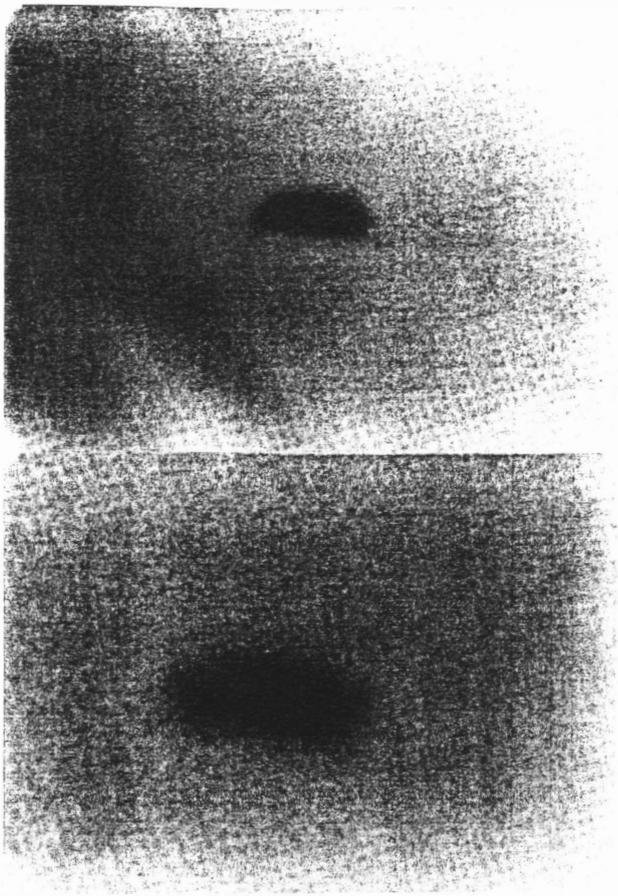
それらの関心事は、やがて天文台を含む広範囲な学術人の参加をみるようになるのであるが、何度も繰返し“火”をつけられなくても動かない日本との違いには隔世の感がある。タレント人がUFO論議に参加すべし、というお上からのお達しでもあるかのごとき風習から、日本も早く脱却し、全国の科学技術者や航空関係者、天文台、気象台、各分野の大学教授等による真剣なUFO論議に発展したものである。しかし、もともとUFO問題とは知識や役職とは関係のない資質面で吸引がみられ、強引な知識では補いきれない部分も認めざるを得ない事実ではあるが。

さて、熱烈なるUFOファンは御存知のように、かつて日本市販のUFO雑誌『UFOと宇宙』誌は1980年代、続々と入る中国、台湾のUFO情勢の進展ぶりを伝えていた。いま、これらを振り返ると、情報や物質的な国家的統制という機構は、“時代遅れ”という民間レベルの不快感を生じたり、指導者いかに国民全体の方向づけなどの恐ろしい面もあるが、不必要な知識を持つる事による真理探求上の弊害を考えれば、事前知識の稀薄な状態を得る直接体験のほうが、堅実的であり、もしも、人類を試料とした地球規模の実験が外宇宙知性によって実施中ならば純粋な結果が生れると考えられる。

『光明日報』に届いた市民からのUFO目撃報告の中に、雲南天文台勤務者から息子が同級生と目撃した空飛ぶ円盤について報告したものがあつた。そして、同じ雲南天文台勤務者張周生氏も、1977年7月8日北京時間19時9分から19時55分間、四川省の自宅で天体観測中、マイナス3等光度相当のラセン形の光体を発見。それは緑色を帯びた青色に輝き、ラセン全体の輪郭は楕円。長軸の直径約5度あり、大熊座αから西へ、水平からの傾斜角15度で降下する直線コースを移動するのを近所の人を交えて観察していた。張氏の描いた観測図は学術的に価値の高いものである。

張周生、読者はこの名前をしかと記憶されたい。何故ならば、この人物こそ、世界最大級のUFO目撃事件を完全予測することになるからである。雲南天文台勤務者の張氏は、自分の観測した現象が、一体何であるのかを知るため、北京や南京の天文機関に照会した。その結果、彼が観測した現象は同時刻頃各地で目撃されていたことが分かった。その範囲は900キロに達し、目撃者は千人にも上つた。また、すでに中国では1970年代初期よりラセンタイプのUFOが出現しており、それらの類似報告が張氏のもとに集められた。

張氏は小さい頃から天文マニアで、天文関係機関から1975年に雲南天文台に移り、その年に白鳥座の新星を発見している。彼は月大の流星、流星群、慧星、人工衛星など多くの空中現象を観察しているとの事で、ラセン物体は生れて初めて目撃したものだとして述べている。張氏はラセンUFOの目撃から5日後の1977年8月1日(北京時間7時5分)勤務地である雲南天文台のある山の頂上でジェット噴流に似た移動物体を目撃し詳細に報告している。



28 October 1961, Morning, Kaifeng, Hounang Province, China. Mr. Chang Ching-lai, a young engineer snapped several photographs during a 7 minute observation.

■1961年、河南省で中国最初のUFO写真が撮影される

1947年前後に始まる欧米の空飛ぶ円盤事件は、50年代から60年代にかけて国家機関によるUFO調査や民間における無数の研究団体を発足させていた。ドイツのヘルマン・オーベルト、米国のエドワード・ルッセル、ドナルド・キリホー、仏のエメ・ミシエル等による報告書が発表され、その一部は日本でも翻訳されて出廻っていた。ソ連ではフェリックス・ジーゲル、アレクサンダー・カザンツェフ、M・アグレストが研究活動を開始していたが、日本にまで届く情報は僅かであった。

この時期、中国でも「円盤」事件があったことは知る人ぞ知るところである。一説によると、1941〜2頃、河北省ないし山西省で撮った写真に帽子型の物体が空中に現れていて、これが中国初のUFO写真とも言われたが、UFO事件の記録が伴う客観的な資料とは云いがたい。

年月日の明確なUFO事件発生による写真撮影は、1961年10月28日に河南省開封市郊外で発生した。その日の早朝、未確認飛行物体が低空を緩やかに移動していくのが住民によって目撃された。あるときはほとんど静止して動かないように見えた。その地区の多くの人が仕事の手を休めて空を仰いだ。若い技師の張青来氏もこの物体を認め、急いでカメラを出してきて飛行物体に向け数枚撮影した。この飛行物体は7分ほどして消えた。この写真は1962年に日本に伝わり、日本の刊行物で発表され、その後欧米のUFO研究誌にも転載された。最近では本書訳者の江晃栄博士が羽咋市「宇宙とUFO国際シンポジウム」での講演で鮮明なその写真を発表している。写真は白黒写真だが、物体が楕円形で周辺部輪郭のややボヤけた力場のような状態が認められる。

3.

■中国のUFO熱は「光明日報」UFO記事に始まった

1978年、中国共産党機関紙「人民日報」は中国初のUFO記事を掲載した。米国外の報道から2年後である。だが、「後の者が先になる」のがUFO界の常である。この記事では、オーストラリアでのセスナ機消失事件、米ソ日本のUFO研究、米国防務省のUFO国際会議など簡単な概略が紹介されたのみで、中国本土でのUFO事件には言及されなかった。UFOは「人事ではない」と、自国の目撃事件を紹介し中国人民の心を刺激したのはその翌年である。

1979年9月2日、中国共産党科学教育宣伝紙「光明日報」は、「空飛ぶ円盤」を「飛碟」(flying saucer)という用語で紹介した中央人民放送局科学技術記者□新炎氏の文を発表した。

“空飛ぶ円盤は存在するか?”という万国に共通したスタートである。事件として紹介されたのは、1977年秋に中国科学院古人類研究所の研究員が湖北省神農架林区で野人調査中、土地の住民が丸い光体の旋回飛行を1分ほど目撃する現場に出合った事。その他、山西省の電気工、河北省の解放軍指揮者、内蒙古の教師ら「知識青年」による空飛ぶ円盤目撃。部隊が集団で目撃した。月のように円形で霧状のガスを噴出する円盤をオートバイで追跡した事件で、いずれも信頼できるものと言えよう。

記事は更に、世界における空飛ぶ円盤目撃とはどんなものか。目撃者は、市民からパイロット、宇宙飛行士、国家元首まで及んでいる事。二ヶ国協同UFO観測計画。宇宙の広がりとその可能性、宇宙の速度や相対性理論、宇宙人の問題にまで幅広くUFOにまつわる課題を展開した。

この記事を読んだ多数の読者から、自分達もUFOを見たという報告が新聞社に寄せられたため、にわかにUFO熱が高まり、「光明日報」では急ぎUFO解説書の出版計画に着手した。

「光明日報」の科学記者金氏は、日本のUFO雑誌『UFOと宇宙』に寄せた中国人民のUFO目撃報告の中で、こう述べている。

「編集部には、全国各地から、空飛ぶ円盤の目撃報告が続々と寄せられてきた。報告者は学生、教師、国家公務員幹部、労働者、地質工作技術者など様々な分野の人々で、その住む地域は陝西省、甘肅省、四川省、江西省、河南省、河北省と広く、特に陝西省と甘肅省からの報告が多かった。これら多数の報告を一つ一つチェックする方法はないが、次の2つの点で内容の真実性を信じる事ができる。」

①目撃者が一人に限られず、数人ないし多数の人々が同じ場所で同時に目撃している。

②同一時間に発生した事例が2つあるが、距離的にかなり離れた省で目撃者が証言している。この2人は互いにまったく知らない人同士で、このことが報告内容の信頼性をかなり有力なものにしている。

「光明日報」に寄せられた目撃報告は一口に云うと内容が精しく、その多くは回転する皿、球、火炎、輪を持つ球体、といった物体あるいは光の輪、ラセン状の緩慢な回転光で、同一起源の未知なる飛行装置の印象が強い。目撃者は現象の空における位置、距離感、継続時間などUFO研究資料として必要な要素を満たしている。

これらを見ると、日本のUFO目撃者より空中観察の報告に知的な訓練がなされており、そうした目撃者密度に比例したUFO出現の計画性を感じる。

中国UFO研究会組織紹介

年6月《飛騨探案》特選編訳・瀋陽市日語学会秘書長陳百海先生に中国におけるUFO研究者・UFO愛好者について紹介を要請し、その結果、「中国UFO研究会第4届理事会名單(1992年5月14日付)の提供を受け、編者はそのうちの住所が明らかでない40名に対して、『THE UFO RESEARCHER』地球版《地球外知性探案》を贈呈。そのうち23名の理事より、礼状、感想文、UFO情報・研究新聞、UFO研究誌、UFO関係研究論文、単行本、UFO報道新聞切抜き、写真などを併送り戴き、また学術交流の申出も多数あった。編者としては、アジアのUFO研究圈委員の一員として可能な限り、支援・情報交換など交流してゆきたいと思っている。最近では独特のくずし字も判読できるようになった。大陸は広いので、同じ事を表現するにも用語が違う。よく「広東語」と「北京語」で話したのでは、お互い意志の疎通が困難といわれる。我々日本人は「漢語」という言い方が親近感を持ちやすい。「漢語」は世界で使用人口のもっとも多い言葉であって、国連の公用語の一つになっている。



■前排左起第一人：楊峻華先生(内蒙古分会秘書長)、第二人：呂彪先生(總會付秘書長・台湾)、第三人：陳林峰先生(總會付理事長・北京)、第四人：王昌彪先生(總會理事・北京)、第五人：肖野先生(總會名譽會長・著名畫家・北京)、第七人：林起先生(總會常務理事・北京)、后排左起第一人：姚文閣先生(女・總會理事・北京)、劉鳳君先生(總會常務理事・山西)、第三人：吳錫謙先生(總會常務理事・上海)、第五人：周小強先生(總會理事・北京)、第六人：金帆先生(總會常務理事・遼寧)、第七人：陳燕燕先生(總會常務理事・北京)第八人：姜華先生(總會付秘書長・北京)、第九人：高原先生(總會付理事長・北京)、最右也：王煥良先生(總會付理事長兼秘書長)



⑤豊かな研究成果
 成立してから二年たったが、その間、全国的な学会が開かれ提出された論文は数百編にものぼった。こうした水準の高い優秀な論文の発表と、優秀な学識者の登場は、社会的にも良い反応が期待される。
 例えば、北京の王崎生による「多維世界と新統一場理論」は、中国の学者の刊行物に発表された後、アメリカの空中現象研究会の評判を受けて招待された。
 河北張宝氏による新型ロケットの原理・理論、反引力宇宙の光子ロケット発動機原理は、世界各ヶ国の研究誌に投稿された。
 ⑦中国UFO研究会の国際活動
 ここ近年来、UFO国際会議がたびたび開催されてきたが、ここ北京では、アメリカ、フランス、イギリス、日本からの世界的に著名なUFO学者を招いて、学会を開催した。同時に、中国UFO研究会の代表がソ連のUFO学会に参加してUFO問題の会談を行なった。また、中国のUFO学者が東京やアメリカの会議に出席し、墜落UFOの現場を視察した。我々の研究会は、多数の国のUFO組織・学者と通信し資料交換を行なった。

2.

中国：そこには、多くの人々が個性や志向に応じて学び取った知識や経験を、最大限に活用しつつ進展する熱気あふれたUFO研究者集団の姿が浮かび上がってくる。
 広大な中国大陸の民が、UFO先進国からの情報輸入だけに頼ることなく、自らUFOあるいは宇宙人、さらには巨大な宇宙社会さえも想定し、それに向かっている動きは、まるで彼らの「歴史的必然」であるかのようだ。
 休刊となった日本版「オムニ」1980年代の話題の集積回路は「十億の中国人がUFOを求めて夜空を見上げている」と中国におけるこの頃のUFO情勢を紹介している。
 中国甘肅省で歩哨の任に任じられていた兵士が、ある夜に林全体を包む青い光の中に周囲をオレンジ色の雲に包まれた平たい楕円形の物体が浮かび、それは2分後猛烈なスピードで東に飛び去ったというものである。
 そのUFO目撃者は中国国民の誇る人民解放軍(PLA)の兵士であった。彼ら兵士は、当局の反応を怖れてながらも目撃体験を口外しなかったが、最近になって多数の人民解放軍兵士がUFO目撃体験を自ら進んで報告するようになり、これら兵士の率直さに刺激されて農民、学生、労働者、教師、そして科学者を含む何千もの人々が、文化大革命の抑圧解放と共に口を開き、中国の最も新しい「UFO目撃」という流行に参加しはじめた、というのである。UFO現象そのものは、人々の中に「潜伏」していた。それが、ある時を堺にして噴出し、それと共に、UFOに対処する人的要素も急速に調っていったというのが中国のUFO研究界の姿ではないだろうか。
 三千年の長きにわたり「天」との親密な関係をもつ続け、政治、宗教、文化、生活など、人間の生存のほぼ全域にわたって天の規制を受けたのは漢民族だけとも言われる。彼らにとって、どうやら「天」とは物理的な大気の層ではなかった様である。また、先祖の霊が住む世界でもなく、意志を持つ宇宙の主宰者の座であった。「天」とは、地上の王が自己の権威と支配の根拠であった。
 地上の統治者は「天」の意志を代行する天子であり、天に見離されるまで政治に従事することができ、とされている。現代風に言えば、空に座す高い知性の許可なくして政(祭り事)を行なう資格なし、という機構があったのである。
 今日、「天」の座は現代地球科学技術の飛行物体が占拠しているかのように見える。古来神祕の「天」には、天に昇った昔の黄帝の姿はない。だが、「天」に「天帝」の住まいに相当する物がなかったからといって、古代人の云う「天」にかかわる問題が消滅した訳ではない。人類の進出に伴い空中基地を若干移動させただけなのかも知れないのだ。
 本文にみられる「星の移動」、つまり地球周囲軌道上の宇宙起原人工物体は、地球人の類似物体との混同を避けるべく、目立たぬ軌道まで退去したのだ。
 代りに、装いも新たな近代的「飛艦」が、空中に配備され、何千、何万、何十万、何百万以上の人々の目に見られているのである。
 そして、その規模たるや、一晩のうちに百万人もの人々に目撃されたり、何十キロにも及ぶ広大な光を空中に放射したりと、さすがに大陸にふさわしい巨大さをもって「天」は臨んでいることがわかる。その光景は、あたかもかの「天帝」が再臨したかの様な錯覚を起こさせるほど威厳に満ち、神秘的である。中国の空はいま未知の訪問者によって活気を呈している。

